JAAGA だより
日米エアフォース友好協会
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会
〒160-0002
東京都新宿区四谷坂町９番７号
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
編集：JAAGA 事務局
印刷：東伸社
ホームページ：http://www.jaaga.jp/

つばさ会 / JAAGA 令和５年度訪米成果報告

TSUBASA-KAI and JAAGA members participate in ASCC 2023

はじめに

丸茂 JAAGA 会長を団長とする令和５年度の JAAGA 訪米団は、９月 10 日 (日) から 15 日 (金) までの６日間にわたる米国訪問を実施した。本訪米では、米空軍・宇宙軍協会 (Air and Space Force Association；AFA) が主催する航空宇宙サイバーカンファレンス 2023（Air, Space Cyber Conference 2023；ASCC2023）への参加、米空軍のシニアリーダーとの直接の意見交換、並びに JAAGA 名誉会員等との交流行事を実施し、JAAGA 設立の目的でもある日米空軍種間の友好親善を促進することに寄与すると共に日米間で関心の高い事項に関する最新の情報を入手することができた。

JAAGA members participate in the Air Space Cyber Conference 2023

特に、AFA 主催の「ASCC2023」への参加では、米航空宇宙軍を主導するトップリーダー、すなわちケンドール空軍長官 (Frank Kendall Ⅲ , Secretary of the Air Force)、C.Q. ブラウン米空軍参謀長（Gen Charles Q. Brown, Jr., Chief of Staff of the Air Force) 及びサルツマン米宇宙軍作戦部長 (Gen B. Chance Saltzman, Chief of Space Operations）の現状認識とビジョンについて理解すると共に、米空軍を取り巻く現状と課題、各種の取組みの進捗状況等を確認することができたことは極めて有意義であった。

また、我が国の状況を含むインド太平洋地域を良く知る米空軍のシニアリーダーである、太平洋空軍司令官のウイルスバック大将（Gen Kenneth S. Wilsbach, PACAF Commander)、空軍参謀本部のシュナイダー中将（Lt Gen Kevin B. Schneider, Director of Staff, Headquarters USAF）や、空軍参謀本部 A2/6 副部長のケネス・ブレイ氏（Mr. Kenneth E. Bray, Deputy Chief of Staff for Intelligence, Surveillance, and Reconnaissance, Headquarters USAF） 及び

～ だより 第 65 号 目次 ～

つばさ会 / JAAGA 令和５年度訪米成果報告・・・・・1
日米相互特技訓練を激励支援・・・・・・・・・・・・5
RED FLAG-Alaska 参加隊員を激励・・・・・・・・・・8
　航空総隊訓練実施部隊指揮官所感・・・・・・・・8
　航空支援集団訓練実施部隊指揮官所感・・・・・・9
　訓練参加隊員（第 403 飛行隊長）所感・・・・・・10
令和５年度 JAAGA 横田基地等研修・・・・・・・・12
第 18 戦闘航空団司令官交代式・・・・・・・・・・16
米空軍士官学校留学生支援「日光研修」・・・・・・17
SPORTEX '23-A・・・・・・・・・・・・・・・・20
スペシャルオリンピックス支援・・・・・・・・・・22
JAAGA グッズの紹介・・・・・・・・・・・・・・23
米空軍将校 航空自衛隊勤務だより・・・・・・・・・24
航空自衛隊コーナー ・・・・・・・・・・・・・・26
米空軍コーナー ・・・・・・・・・・・・・・・・27
新コーナー「宇宙作戦群の活動紹介」・・・・・・・29
在日米空軍各基地の行事への参加・・・・・・・・・30
JAAGA 沖縄支部便り・・・・・・・・・・・・・・33
JAAGA 理事の活動紹介「財務理事」・・・・・・・・34
新入会員紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・35
賛助会員の皆様へ・・・・・・・・・・・・・・・・35
投稿募集ご案内・・・・・・・・・・・・・・・・・35
会員募集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

統合参謀本部 J4 のコシンスキー中将（Lt Gen Leonard J. Kosinski, Director for Logistics, J4, Joint Staff）との懇談を通じて、双方の関心事項についてより具体的な意見交換を実施することにより、相互に理解を深めることができた。今回の訪米機会を活用して、ウイルスバック大将及びコシンスキー中将に対し JAAGA 名誉会員の委嘱を行い快諾いただいた。

なお、計画段階で予定していた米宇宙軍のロケット打ち上げ基地であるバンデンバーグ宇宙基地の研修が先方の任務遂行上の理由によりキャンセルとなり、急速に進化する宇宙における活動の状況を現場にて確認する機会を失したことは極めて残念であった。この計画の変更の影響等により、訪米団の規模が例年10名のところ、今年度は8名となった。訪米団参加者は以下のとおり。

○団　長：丸茂吉成　会長　（三菱電機株式会社）
○副団長：井筒俊司　顧問　（株式会社アストロスケール）
○団　員：前原弘昭　理事長（三菱重工業株式会社）
　　武藤茂樹　副理事長
　　（東京海上日動火災保険株式会社）
　　荒木淳一　理事　（川崎重工業株式会社）
　　井上浩秀　理事　（株式会社 IHI）
　　上之谷寛　理事　（双日株式会社）
　　引田　淳　理事　（三菱商事株式会社）

1　AFA 主催の「ASCC2023」への参加

9 月 11 日（月）～ 13 日（水）の 3 日間、ワシントン DC で行われた会議には、米軍人、諸外国の軍人、退役軍人等が参加しており、昨年よりも多い約 18,000 人が参加する盛況な会議であった。今年は空幕からも初めての参加があり、それぞれの視点で情報収集及び交流ができるなど、有意義な機会になったのではないかと考える。

会議を通じて、ケンドール空軍長官、C.Q. ブラウン前空軍参謀長（現統合参謀本部議長）、及びサルツマン宇宙作戦部長の情勢認識及びビジョンについて理解するとともに、航空、宇宙及びサイバーの各テーマに応じた最新の議論について情報収集を実施した。

会議と同時に開催された展示会では、ウクライナ戦争で使用されている装備品やシステムの紹介が多く展示されていたが、会議におけるディスカッションでは、昨年に比較しウクライナ戦争に関する言及が減り、多くのセッションにおいて中国との競争を念頭に置いた発言がみられた。

（1）ケンドール空軍長官の基調講演

USAF Secretary Kendall emphasizes seven essentials

昨年に引き続き中国への対応を最優先する姿勢であり、中国に対する優位性を確保するためには、従来から主張してきた「7 つの必須事項」を上げた上で、米空軍及び宇宙軍の最適化の推進が必要であることを強調していた。

「7 つの必須事項」とは以下のとおり。

①強靭かつ有効な宇宙戦力組成と戦力設計の明確化
②運用上最適化された ABMS/AF JADC2 の実現
③次世代制空システムの明確化
④厳しい作戦環境下における広域における移動目標攻撃の実現
⑤戦闘状況下における最適化された強靭な基地、維持整備及び通信の明確化
⑥ B-21 長距離攻撃ファミリーによるシステムの明確化
⑦対等な競争相手との戦争に対する空軍省としての即応体制の確保

そして米空軍、宇宙軍の最適化に必要な事項として、「7 つの必須事項」を推進すること、AFFORGEN や新たな宇宙軍のコンポーネントを構築すること、或いは効率的に戦力を投入することが可能な Air Task Force を編成するために中央軍で 2 個、インド太平洋軍で 1 個の部隊を試験的に運用していることが示された。このような最適化は 2024 年までに検討を終えて実行に移すとされ、戦争に備える体制を確保することが抑止力となることを強調していた。

（2）C.Q ブラウン空軍参謀長の基調講演

President Marumo and Chief Director Muto are talking with Gen Brown and Gen Wilsbach

ブラウン参謀総長は、「空軍の現状」と題し、これまでと同様に変化し続けることの必要性と重要性を重ねて強調していた。ドクトリンの作成では、ページ数を 16 ページに削減したことにより、隊員の理解促進及び普及を図ることができたことを、重要な変化の例として紹介していた。

また、ブラウン参謀長が求める変化を促すための行動指針の ABCD をあらためて取り上げて説明した。第 1 の Airman は、個々の兵士の能力を発揮させるための生活環境

の改善や教育訓練プログラムの見直しの実施である。第２の Bureaucracy は、敵より早い意思決定を行うためには既存のプロセスにとらわれることのない創意工夫が必要であり、官僚主義からの脱却が重要であることを強調している。第３の Competition は、競争的思考や比較分析により機敏性を向上させることを目標として、ACE を推進するとともに、モビリティーガーディアン演習を実施した。

最後の Design Implementation は、作戦に適した組織の編制を行うことであり、「AFFORGEN（Air Force Force Generation）」や「Air Task Force」であるとしている。

国益を護り、紛争を抑止し、使命を達成するためには、敵や環境の変化に適応するのではなく、変化を予測し先行的に変化することが重要であることを改めて強調していた。

（３）サルツマン宇宙作戦部長の基調講演

「宇宙軍の現状」として創設４年目の宇宙軍が、競争が激化している宇宙領域において国益を防護する新たな軍種となるために、最適化や変化を追求する姿勢の重要性が述べられ、現在宇宙軍が取り組んでいる４つのプロセス、「戦力設計」、「戦力開発」、「戦力生成」、「戦力投入」について紹介された。

Gen Saltzman describes the current situation of the Space Force

「戦力設計」とは、従来の脅威と非対称な脅威の両方に対応する宇宙軍の能力を構築することである。「戦力開発」は、新たな教育訓練プログラムに投資して演習やウォーゲーミングを通じて、最新の知識、スキル及び経験を身につけること。「戦力生成」は、運用と管理を統一指揮官の下で行う、新しいタイプの部隊のことであり、統合ミッションデルタの実証を開始しているとのことであった。「戦力投入」としては、昨年、インド太平洋宇宙軍、在韓米宇宙軍、中央宇宙軍を創設し、12 月には欧州軍及びアフリカ軍向けの宇宙コンポーネントを立ちあげることを予定している。

（４）パネルディスカッション等

３日間の会議の中で 38 個のパネルディスカッション等が行われたことから、訪米団として手分けして可能な限り関心の高い「サイバー戦」「宇宙作戦」「グローバル・ストライク」「航空優勢」などに関わる情報収集を行った。

38 panel discussions are held during the period

２　米空軍シニアリーダーとの意見交換

太平洋空軍司令官等のシニアリーダーと個別に面談し、中国に対する抑止及び対処体制の整備状況並びに日米共同での対処要領等について具体的な意見交換を実施した。

（１）ウイルスバック太平洋空軍司令官

「ACE（Agile Combat Employment）」の体制整備を鋭意進めており、作戦基盤の確保のため、グアム地区では、テニアン島及びグアム島の飛行場の滑走路及び誘導路の増設や駐機場の拡張を行うとともに、フィリピンとの防衛協力強化協定に基づき、フィリピンにおける展開基盤を確保したとのことであった。また、ACE を支える基盤として、後方補給物品や食料及び水などをコンテナに入れ、事前配置することを実地で進めているとのことであった。

The current situation of the US Pacific AF is explained

作戦間の弾薬の所要に対する後方補給の不足は明らかであり、米国内の生産能力だけでは不足であるため、同盟国等の協力により弾薬の製造能力を確保する必要があるとの認識であった。

（２）シュナイダー空軍参謀本部参謀長（次期太平洋空軍司令官・前在日米軍司令官）

米空軍の最大の課題は、中国軍に対して優位性を確保するために戦力設計を最適化することであり、空軍長官の最適化要求について専門家チームが検討を進め、来年１月には検討結果を出す予定である。

Lt Gen Schneider explains the biggest challenge of USAF

「JADC2（Joint All-Domain Command and Control）」は意思決定速度を上げるため、データを早く伝達・処理すること、そしてこのためには有効なネットワークの構築が緊要であり、現在の議論では「CJADC2（Combined JADC2）」として同盟国等との共同を念頭に置いている。

（３）空軍参謀本部 A2/6 ケネス ブレイ氏

昨年に続き、スタンドオフ攻撃能力の発揮に欠かせないターゲッティングについて意見交換を実施した。

広大な戦域における緊要な目標を秒単位での目標情報を

更新することにより追尾することを目標とした新たなシステムの構築を考えている。そのためにはあらゆるセンサー情報を集約するためのデータ標準化が重要であるとともに、AI を活用しつつも人間の介在も必要であるとしている。

Exchanging views on “the targeting” of standoff attacks

（4）統合参謀本部 J4 コシンスキー中将

「DDOC（The Deployment and Distribution Operations Center）」を各地域軍に設置して既に運用を開始しているが、組織編制のガイダンスが不在のため、編制の標準化を進めている。

戦域における後方補給上の課題の一つは、弾薬の不足であり、特に 155 ｍｍ砲弾の製造能力が限られていることから、同盟国との協力について調整を進めている。また、攻撃ミサイルの長射程化、高速化、精密攻撃化が進んでいることから、後方補給拠点の防護の重要性が増している。ウクライナ支援の拠点であるポーランドでは空港の防護にペトリオットが有効に機能しているとの説明があった。

Briefing on the operation of DDOC, etc

3　JAAGA 名誉会員等との交流

（1）JAAGA 名誉会員等との夕食会

Dinner with honorary members

訪米団は訪米初日に、「アーミー・ネービークラブ」において日米共催により名誉会員との夕食会を実施した。米側代表のシュワルツ元空軍参謀長と丸茂団長の挨拶で会が始まると、近況の報告や日本における勤務時代の昔話に話題が及び、時を忘れて大いに盛り上がり、名誉会員との人間関係をあらためて強化することができた。

米側の参加者は、以下のとおり。

・シュワルツ退役大将（元空軍参謀長）
・ライト退役中将 AFA (Air and Space Force Association) 会長（元第 5 空軍司令官）
・ベガード退役大将（元太平洋空軍司令官）
・カーライル退役大将（元航空戦闘軍司令官）
・レイモンド退役大将（元宇宙作戦部長）
・ウイルスバック大将（太平洋空軍司令官・次期航空戦闘軍司令官）
・ドーラン退役中将（元統合参謀本部第 3 部長）
・シュナイダー中将（空軍参謀本部幕僚長・次期太平洋空軍司令官）
・ラップ中将（第 5 空軍司令官）

Everyone is smiling and happy to see each other again

（2）名誉会員の委嘱

今回の訪米に際し、ウイルスバック太平洋空軍司令官及びコシンスキー統合参謀本部第 4 部長（前第 5 空軍副司令官）に対し、丸茂会長より JAAGA 名誉会員の委嘱を行うとともに盾を手交した。両名からは快諾をいただき、今後とも日米同盟強化への重要な役割りを果たしていかれることが期待される。（写真上がウイルスバック太平洋空軍司令官、写真下がコシンスキー統合参謀本部第 4 部長）

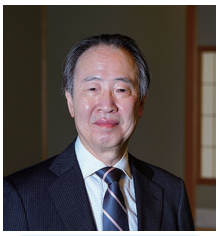
Gen Wilsbach receives a plaque of HONORARY MEMBER from President Marumo

Lt Gen Kosinski receives a plaque of HONORARY MEMBER from President Marumo

4　冨田駐米大使表敬訪問

訪米の最後に、冨田駐米大使に対する表敬訪問を実施し、最新の日米情勢について意見交換を実施した。

丸茂団長からは今回の JAAGA 訪米の成果、並びに米空軍、宇宙軍及び航空自衛隊の課題などについて説明を実施したところ、大使からは日米関係強化への感謝の意が示された。



Mr. Koji Tomita, Japanese Ambassador to the USA

また、米国から見た日米関係や米国の台湾海峡危機への対応に関わるスタンスについてご知見をいただくとともに、日台関係などについて意見交換を実施した。

おわりに

今回の JAAGA だよりでは訪米団の活動の概要についてお伝えしたが、訪米成果については令和６年２月に実施する報告会においてあらためてご報告するので、空幕部長等講演に合わせて実施される成果報告会に奮ってご参加いただきたくお願い申し上げます。

最後に、今回の訪米は多くの方々のご協力により実施することができました。あらためてこの場を借りて御礼申し上げます。

訪米事業にご協力いただいた方々は、以下のとおり。

・航空幕僚監部総務課、防衛課、運用支援課、情報課
・米国防衛駐在官中里１佐、井上２佐
・バンデンバーグ宇宙基地連絡官平野２佐
・訪米団員所属企業の皆様
・全日空株式会社の皆様
・JAAGA 名誉会員の皆様
・つばさ会及び JAAGA 会員の皆様

（武藤副理事長記）

日米相互特技訓練を激励支援

JAAGA cheers and supports Japan-U.S. Bilateral NCO Exchange Program

日米相互特技訓練の空幕担当者瀬尾太佑２等空曹は、これまで意欲的に業務に取組まれ、多くの実績を残されたが、９月１日付で南西航空警戒管制団にご栄転された。後任には８月 21 日付で特別航空輸送隊から転入された宮本太郎１等空曹が就かれた。就任間もなく多忙な中、宮本１曹に「昨年度の訓練実施状況とその特徴」、「令和５年度の訓練調整状況」について寄稿して頂いた。また、ご本人からのメッセージも頂いたので紹介する。

米空軍担当部署との緊密な連携により、更に充実した訓練が計画・実行されることを期待する。（太田理事記）

８月に瀬尾２曹から業務を引継ぎました、宮本１曹です。私は、特別航空輸送隊で空中輸送員として長年勤務してまいりました。以前の勤務とは全く違う業務に追われており大変ですが、「すべては自分の成長のため」と思い、日々頑張っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

【令和４年度の訓練実施状況】と【令和５年度の訓練計画・方向性】

【令和４年度の訓練実施状況】

令和５年３月 20 日（月）～ 23 日（木）、米空軍横田基地第 374 空輸航空団における訓練に空自から 16 名の隊員が参加した。米空軍からも 13 名の Supervisor が参加して、空自隊員に対しマンツーマンで訓練を実施し、日米相互に同一特技間における訓練により各特技能力の向上を図った。特に、相互理解を深めるため、日米相互の特技に合致した隊員を選考し、OJT を中心とした訓練を実施することで、より実践的かつ効果的な訓練となった。訓練内容は次のとおりで、本訓練に参加した３名の空自隊員から寄稿を得た。

・各特技レベルでの訓練実施要領の実地確認及び意見交換
・メンタルヘルス及びレジリエンス教育
・コミュニケーション能力及びリーダーシップ能力向上教育

一方、空自側受入れの訓練については、残念ながら他の訓練との兼ね合い等により実現できなかった。

【令和５年度の訓練計画・方向性】

令和６年１月下旬から３月までの間の約１週間、嘉手納基地、横田基地及び三沢基地の各基地における訓練への参加を調整中である。なお、下士官レベルでの日米間の連携をより強化していくため、後方支援も含めた多特技の空自隊員の参加を視野に入れ、検討中である。

（宮本１曹記）

【令和４年度日米相互特技訓練参加隊員の所感】

○ 動力器材整備

【受け入れ部隊】

374th Aircraft Maintenance Squadron

【参加者】

第３輸送航空隊装備隊 和田祐介２曹 / SSgt David Ortiz

【訓練概要】

動力器材のオルタネータ及びバッテリー交換を実施したほか、レジリエンストレーニングに参加

【和田２曹所感】

私は、計器整備員及び中堅空曹としてKC-46A空中給油輸送機の整備作業に従事するとともに、日々後輩隊員の指導を実施しています。また、以前、那覇基地の９空団に勤務していた際に、米空軍の隊員を受け入れる立場で訓練に参加したことがあり、その時から機会があれば次は自らが米空軍側に赴き、航空自衛隊と米空軍の違いを肌で体験したいと思っていましたので、今回、本訓練に参加できたことを大変嬉しく思っています。

Learning how to control tools completely

訓練は、私の特技職と業務内容が異なっていたため、慣れない器材及び作業に悪戦苦闘しながらでしたが、対番者のオルティス３等軍曹の丁寧で親切なサポートを受け、無事にやり遂げることができました。全体を通して特に感銘を受けた点は、対番者のオルティス３等軍曹の中級空曹としての「コミュニケーション能力及びリーダーシップの高さ」です。米空軍では多種多様な人達が勤務しており、また航空自衛隊と比較しても、人数も多く考え方も多様です。その中で、自らの意思をしっかり伝えるだけでなく、意見を聞き、まとめ上げる能力がとても優れていると感じ、同じ中堅空曹として参考になりました。

Changing batteries

SSgt David Ortiz

High-pressure washing ground equipment

本訓練を通して、米空軍全体に対して感じたことは２点あります。１点目は、業務中はしっかりと集中しつつも、積極的にユーモアを取り入れたコミュニケーションを図ることにより、安全意識を高揚させながら楽しく仕事をしているように感じたことです。２点目は、訓練期間中も様々なイベントを企画実行しており、それらのイベントを通じて基地全体がまとまっていると感じました。

最後に、航空自衛隊の任務が多様化していく中で、実務レベルで日米隊員同士が交流して相互理解を深めることは、とても重要であると感じました。今後更なる英語能力の向上に努めるとともに、この経験を自らの体験で終わらせることなく後輩隊員に伝えていき、米空軍へ興味を持つきっかけや後輩隊員の英語能力向上に繋げていきたいと思います。

○ 会計

【受け入れ部隊】

374th Comptroller Squadron

【参加者】

第８航空団会計隊 瀧口政志２曹

中部航空警戒管制団会計隊 松尾智行３曹

/ TSgt Daniel Wong

【訓練概要】

米空軍の会計の概要、上級部隊との業務調整、予算処理、職員給与の予算支払処理、旅費の処理要領の教育及び実践

【瀧口２曹所感】

対番者ダニエルウォン２等軍曹をはじめ、隊の皆さんの多大なる支援のもと充実した訓練が実施できました。訓練開始にあたり職場に入って驚いたのは、職場にほとんど紙の資料が無かったことです。なぜ無いのかを聞いたところ、十数年前にかなりのコストをかけてシステムの変更に取り組んだことにより、ペーパーレスを実現したとのことでした。プリンターも複合機１台だけで、ほとんど印刷されること

なく、データでの処理で業務が完了していました。しかも一つのシステムで横田基地内だけでなく全米空軍の会計機関とデータを共有できるということに再び驚きました。ただ共通した悩みもあるようで、昨今の光熱水料の高騰には頭を悩ませており、ダニエルから質問されましたが、私の英語能力の脆弱さと日米間での規則や運用面での違いがあるので、適切なアドバイスができなかったのは残念でした。

Playing “KICK SOCCER” with squadron members

Lunch time BBQ

私自身は英会話があまり得意ではなかったですが、相手側の聞こうという姿勢に助けられて、更に松尾３曹と一緒に実施したことにより、何とか４日間を乗り切ることができました。特に３日目は、自殺防止の集合教育、コミュニケーション教育等に参加したことに加え、昼食の BBQ やキックサッカー訓練などにも参加し、米空軍の皆さんと親睦を深めることができました。

Good smile after exercise

本当に充実した訓練で、参加にご尽力いただいた方々に感謝したいです。

○ **航空機整備**

【受け入れ部隊】

374th Aircraft Maintenance Squadron

【参加者】

補給本部航空機部　蘆塚祐二２曹 / MSgt Charlie Manz

【訓練概要】

米空軍における整備体系、整備統制及び品質管理業務並びに各特技レベルの訓練実施要領の実地確認及び意見交換、自殺防止及びメンタルヘルス教育等に係る訓練を実施

【蘆塚２曹所感】

今まで参加した海外訓練とは違い、今回の訓練は日常の米空軍の中に飛び込んだ感覚で最初は戸惑いましたが、時間が経つにつれて緊張もほぐれ、全てが新鮮であり、刺激的で充実した訓練になりました。

対番者のチャーリー１等軍曹は、航空自衛隊でいう整備統制業務に従事していました。一人で 80 人の整備員をコントロールしており、整備統制だけでなく、品質保証及び各特技レベルの訓練にも携わっていました。

With MSgt Manz on C-130J’s wing

各種業務の事務手続きは、ほとんどが PC で構築されているシステムを介して業務の効率化が図られており、航空自衛隊との違いを感じました。

整備の現場に連れて行ってもらい、印象に残っているのは、整備器材等の管理の徹底及び若年隊員の整備への関心の高さです。整備器材等の管理については、各種工具類は個人に貸与されておらず、毎日、器材庫に借りに行き、使わない時間は鍵を掛けられる場所に一時保管し、返却するときはチェックを受けていました。整備器材は、バーコードで管理されていました。格納庫では、若年隊員が積極的にコミュニケーションをとって活発に整備の質問や説明をしている姿を見ることができ、整備への関心の高さを感じました。

今回の訓練で感じた業務の効率化と整備器材等の管理の徹底は、私が整備の現場にいた時の課題でもあり、大変参考となり貴重な経験が出来ました。今回の経験を自分の身近なところから伝えていき、多くの隊員にも経験してもらいたいです。

With Koku-Jieitai participants and squadron members

最後に、今回の訓練の参加にあたり、米空軍の関係者、374 空輸航空団の方々及び空自関係者、支援してくださった職場の方々に感謝申し上げます。

作：宇山 OB

RED FLAG-Alaska 参加隊員を激励

JAAGA cheers Koku-Jieitai Participants to RED FLAG-Alaska

JAAGA Chairman Maehara, Director Yamada and Ikeda called on Lt Gen Suzuki, Commander of Air Defence Command & Lt Gen Morita VC/ADC & Maj Gen Sagawa COS/ADC in Yokota AB

Chairman Maehara, Director Yamada and Ikeda called on Lt Gen Morikawa, Commander of Air Support Command & Maj Gen Kajiya VC/ASC in Fuchu AB

JAAGA 前原理事長、山田理事、池田理事が、5 月 22 日（月）に航空総隊司令官鈴木康彦空将を、5 月 23 日に航空支援集団司令官森川龍介空将を訪問し、「レッド・フラッグ・アラスカ（RED FLAG-Alaska）23-2」訓練に参加する航空総隊及び航空支援集団の参加部隊を激励し、訓練の成功を祈念した。

両司令官からは共に「JAAGA からの激励に心から感謝申し上げます」との感謝の意が表せられ、特に鈴木総隊司令官からは「年々訓練の質が高くなってきている。日米お互いの信頼関係が高まってきている証左と捉えており、大いなる成果を期待したい」とのコメントがあり、森川支援集団司令官からは「空自輸送機が海外に派遣される機会が多くなっている。RFA を輸送機部隊の技量を上げる絶好の機会と捉えて積極的に臨みたい。」との抱負が述べられた。

本訓練は、米空軍が実施する多国間演習に航空自衛隊が参加し、日米共同訓練を実施することにより、部隊の戦術技量及び日米共同対処能力の向上を期するものである。期間は 5 月 26 日 (金) ～ 7 月 1 日（土）の間（展開、撤収を含む）、米国アラスカ州アイルソン空軍基地及びエレメンドルフ・リチャードソン統合基地並びに同周辺空域等において実施された。航空総隊から第 2 航空団（千歳）の人員約 190 名、F-15×6 機が参加、航空支援集団から第 2 輸送航空隊 (入間) の人員約 70 名、C-2×1 機が参加し、防空戦闘訓練、戦術攻撃訓練、戦術空輸訓練等が実施された。

（池田理事記）

寄稿　　レッド・フラッグ・アラスカに参加して

航空総隊訓練実施部隊指揮官
北部航空方面隊司令部防衛部長　1 等空佐　倉地　康平

JAAGA 会員の皆様におかれましては、益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。レッド・フラッグ・アラスカ訓練参加に際しましては、格別のご支援をいただき、全訓練参加者を代表して御礼を申し上げます。

2003 年、航空自衛隊は初めてアラスカの地へ F-15 戦闘機を派遣し、レッド・フラッグ・アラスカの前身である、コープ・サンダーに参加しました。それから 20 年目の節目となる今回、縁がありまして訓練実施部隊指揮官として本訓練に参加させていただきました。航空自衛隊がこれまで積み上げてきた海外訓練の経験を基に、無事訓練を終え、多大な成果を持ち帰ることができました。

訓練には航空総隊から第 2 航空団の F-15J/DJ（6 機）と警戒航空団の E-767 E（1 機）、約 190 名の隊員が参加し、コロナ禍が明けて初めての本格的な参加となりました。

Commemorative photo in front of the Japanese F-15 with the participating members

コロナによる制約はなかったものの、今年は基地内での宿泊及び食事が大きく制限されたため、基地の最寄りの町であるフェアバンクス及びアンカレッジ市内のホテルに宿泊する等、例年とは異なる苦労もあった生活環境での訓練参加となりました。

F-15 team is waiting for clearance before taxiing

レッド・フラッグは、ベトナム戦争時に米空軍が得た苦い教訓に基づき、実戦未経験の操縦者に実戦に近い環境による訓練を経験させ、実戦における生存率を向上させることを目的の一つとして始められました。航空自衛隊は毎年のようにこの訓練に参加しておりますが、操縦者や管制官達の多くは初めての参加となりました。訓練に参加した若い操縦者や管制官達は、訓練の中で著しい成長を遂げており、非常に多くの経験と自信を身につけて帰ってくることができました。また、20 年前とは安全保障環境及び装備品等も変化していることから、米空軍の訓練内容及び運用要領も変化しており、最新の状況を理解するとともに、本訓練を通じて、日米間における共同対処能力及び相互運用性を着実に向上させることができました。

Fuel refueling work is also being carried out jointly by Japan and U.S.

私自身、約 15 年ぶりに本訓練に参加しましたが、操縦者として参加した時の訓練経験により大きく成長させてもらったことを思い出すとともに、日米の若い参加者達から今の戦い方を学ばせてもらいました。

Pilots have preliminary briefings in detail and fly into the vast training area

今回、レッド・フラッグ・アラスカに参加した米軍隊員の中には日米共同訓練に参加したことのない者も多く、訓練を通じて航空自衛隊の能力を理解してもらうことができたものと考えます。また、約 1 か月に及ぶ訓練期間を通じ、訓練及び訓練以外の機会において米軍と交流することにより、現場隊員間の信頼関係の醸成を図ることができ、強固な日米同盟の一助とすることができたものと確信しております。

末筆ではございますが、会員皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げ、本訓練参加の所感とさせていただきます。

寄稿　　レッド・フラッグ・アラスカに参加して

航空支援集団訓練実施部隊指揮官
第２輸送航空隊副司令　１等空佐　川口　裕史

JAAGA 会員の皆様、日頃から現役隊員の活動に関し、物心両面にわたるご支援ありがとうございます。

令和５年６月１日から６月 27 日までの間、令和５年度「RED FLAG ALASKA23-2」（以下、「RFA23-2」という。）に航空支援集団の訓練実施部隊指揮官として参加してきましたので、その活動概要についてご紹介したいと思います。

RFA は米空軍が実施する訓練であり、以前は「COPE THUNDER」と呼ばれていましたが、2006 年に RFA と名称変更したものです。航空支援集団としては、「COPE THUNDER」時代の 1996 年から 2003 年まで C-130H を参加させており、RFA となってからは、2010 年から 2019 年まで毎年 C-130H 及び KC-767 を参加させてきました。2020 年以降については、各種海外訓練の見直しに伴い RFA への参加が隔年になったことと、2021 年については新型コロナの感染拡大により参加を見送ったことから、今回の参加は航空支援集団としては久しぶりの参加となりました。

加えて、今回は C-130H ではなく初めて C-2 が参加することになり、第３輸送航空隊としても初めて訓練隊に機体や人員を差し出すことになりました。そして、コロナワクチン接種や英語能力等の関係から第２輸送航空隊からも指揮官や機長を差し出すという混成での訓練参加となりました。C-130H での長年の実績があり、色々な申し送りがあったものの、初めての差し出しということで、ご多聞にもれず隊員の英会話能力の引き上げに苦労し、また細かい管理面でのノウハウが手探りとなってしまったことは否めません。

アラスカでの日米共同訓練への参加は総隊も含めて歴史

が長いので、過去に経験された方も多いのではないかと思いますが、今回から大きく変わったことは宿泊場所が基地の外のホテルになったことです。これは新型コロナ感染拡大に伴い基地内ホテルの利用に制限がかかったことだけでなく、今後についても米軍人以外の訓練参加者については原則として基地内ホテルの利用は認めない方針に変わったとのことでしたので、今後も基地の外のホテルを利用せざるを得なくなるのではないかと思われます。

我々の展開先はエレメンドルフ・リチャードソン統合基地（以下、「JBER」という。）でしたが、基地の外のホテルとなったことにより毎日の通勤が大変でした。また６月はアラスカの観光シーズンでもあり、ホテルの確保にも苦労しました。我々が宿泊したホテルは基地まで車で 30 分のところにあり、毎日往復に１時間以上かかるだけでなく、不具合対応や休日の作業などでも移動時間が大きく影響しました。加えて、同じ基地に展開していた総隊の E-767 の部隊は別のホテルに宿泊しており、衛生や会計は我々が支援していたため、担当者はホテル間の移動にも苦労しました。

訓練内容の細部や成果については訓練隊長の所感に譲りますが、指揮官として感じた教訓は、隊員の健康管理と機体の整備作業についてです。

すでに新型コロナウィルス感染症は５類に移行されていましたが、体調不良者が多発する可能性は否定できず、また実際にそれなりの隊員が発熱しました。ホテルでの隔離のために部屋替えを工夫するなどしましたが、基地内の勤務場所も比較的密な環境にありました。訓練参加を主眼に置き、その影響を局限するために特技ごとの隊員保全を念頭に、感染防止対策に頭を悩ませました。

C-2 が現地に着いた初期の段階で、原因究明に時間のかかった不具合が発生し、その整備作業のために各種調整が必要となりました。JBER は大きな基地なので C-2 の整備作業については問題ないと考えていましたが、高所作業車を使った整備作業も必要となったため、その調整には整備幹部をはじめとして整備員が活躍することになりました。C-2 は、国外での活動の機会も増えていますが、整備態勢についてより幅広に考えていかなければならないと感じたところです。

Huge C-2 maintenance needs an up-level work vehicle

今回の訓練を通じて、部隊の戦術技量や米空軍との相互運用性の向上を図るとともに、個々の隊員としても多くの貴重な経験をすることができました。この経験を活かし、輸送機部隊の更なる任務遂行能力の向上を図っていきたいと考えています。

Participants learn a lot and strenghten their bond

末筆となりますが、会員の皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げるとともに、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

寄稿　　レッド・フラッグ・アラスカ参加所感

第４０３飛行隊長
２等空佐　鈴木　基文

第３輸送航空隊は、6 月 1 日から 6 月 27 日までの間、レッド・フラッグ・アラスカ 23-2 に参加（展開、撤収等を含む）し、実践的訓練環境の下、部隊の戦術技量及び米空軍との相互運用性の向上を図りました。第３輸送航空隊が訓練実施部隊としてレッド・フラッグ・アラスカに参加するのは今回が初めてであることに加え、C-2 としても初の訓練参加であったことから、隊員一丸となって万全な準備を整えたうえで訓練に臨み、大きな成果を得て帰国することができました。

国内での準備段階では、レッド・フラッグ・アラスカ経験者を中心として、輸送機訓練隊が展開するエレメンドルフ・リチャードソン統合基地や訓練が実施されるレッド・フラッグ

C-2 just arrives at the JBER（Joint Base Elmendorf Richardson）

C-2 takes action to avoid threats

訓練空域の飛行要領、各種制限をはじめとする注意事項等の把握、飛行計画で使用する地図の作成等、飛行安全を確保しつつ最大限の訓練効果を得るための準備に取り組みました。余談ですが、訓練隊が持参した飛行計画用の地図は米空軍パイロットからも評判が良く、昨今は飛行準備についても様々な場面でデジタル化が進んでおりますが、日米双方が同じ認識を共有し、作戦計画を立案するのにアナログ手法も意外と役立つことが分かりました。

飛行訓練では、レッド・フォースとブルー・フォースに分かれ、日米の戦闘機部隊や警戒管制部隊と連携しつつ、様々な状況における戦術空輸を演練しました。輸送機部隊として、米空軍の C-17 や C-130J との共同作戦計画を立案するにあたり、C-2 は、米空軍輸送機パイロットに馴染みのない機体であることから、巡航速度や搭載能力をはじめとする双方の機体性能や諸元をよく理解したうえで計画立案を進めていく必要があり、そのような観点からも今回の訓練を通じて一層の相互運用性の向上が図れたものと考えます。そして実際の訓練では、日本では考えられないほど広大かつ制約の少ない訓練空域において、C-2 の持つ最大性能を思う存分発揮することができました。中でも特に意義深かったのは、航空優勢を獲得しつつ、戦域内に所在する飛行場等に着陸して人員や物資を空輸する作戦を模擬した訓練です。日本の訓練空域ではなかなか実施できない状況における訓練であり、大変貴重な経験となりました。また上空では、輸送機部隊のチーム・リードを中心として無線で臨機に調整し合い、刻々と変化する状況に対処することで、日米共同による対処能力の向上を図ることができたほか、終盤には双方のパイロットが相互に体験搭乗を実施、つまり、米空軍 C-17 パイロットが C-2、航空自衛隊側の訓練隊指揮官が C-17 に搭乗し、それぞれの運用要領や性能を実地に体験することにより、相互理解のより一層の促進を図ることができました。

Koku-Jieitai C-2 taxies following the USAF C-17

加えて今回のレッド・フラッグ・アラスカでは、運用面のみならず、整備面でも大きな成果を得ることができました。というのも、これまでの訓練に主に参加してきた C-130H と違い、米空軍に馴染みのない C-2 の整備を行うには、各種調整をより綿密に実施する必要があったからです。そのため米空軍から整備器材を借用する際の調整には実地に米側整備員の立会いを得るようにして航空自衛隊側が要望する器材を円滑に借用できる環境を整えることができたほか、現場における整備員間の交流を通じて日米間における整備業務の共通点や相異点について、双方の理解を深めることができました。

Japanese and Australian members working to unload the cargo

Commemorative crew photo after training

以上のとおり、今回、歴史と伝統のあるレッド・フラッグ・アラスカに訓練実施部隊として初めて参加させて頂き、そこで得た様々な挑戦や失敗の経験を通じて部隊の任務遂行能力をしっかりと向上させることができたものと確信しております。隊員一同、任務遂行能力のより一層の向上を目指し、これからも訓練等に日々精進していく所存です。

作：宇山 OB

令和５年度 JAAGA 横田基地等研修

JAAGA members' 2023 Visit to Yokota AB on October 3

Group photo of JAAGA study tour members

【全般】

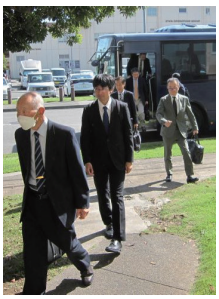
10 月３日（火）、昨年に引き続き横田基地研修が実施された（正会員５名、個人賛助会員 15 名、法人賛助会員 13 名、理事４名、計 37 名）。米第５空軍司令部及び航空総隊司令部による綿密な受け入れ計画により、研修全般は非常に順調に実施され、本研修により横田基地全般を理解することが出来、防衛意識を高揚させる目的を果たすことができた。

＜結団式＞

Inaugural meeting at Fussa st.

９時、JR 福生駅にて受付開始。続々と参加者が到着するなか、今瀬理事により手際よく受付業務が実施され、予定よりも 10 分近く早く受付を完了し、そのまま結団式の開始となった。結団式は駅東口のペデストリアンデッキで行われたが、晴れ渡った青空の下、さわやかな空気に包まれながら、和やかな雰囲気であった。結団式では、菊田理事から高橋団長（正会員）、西脇副団長（個人賛助会員）、岡部副団長（法人賛助会員）はじめ各参加者が紹介され、団長の「充実した研修にしましょう」との挨拶を頂き、終了した。

＜横田基地へ＞



Getting off a USAF bus

米第５空軍によるバスに乗り込むと、いよいよ横田基地への移動が始まった。参加者は車窓から何となくアメリカナイズされた街並みを眺めながらの約 10 分間の移動を楽しんだ。第５ゲートに到着後、社内にて MP による身分証チェックを受け、いよいよ入門である。通常かなり煩雑な手続きが必要であるが、しっかりした事前調整によりごく簡略化されたものであった。

＜第５空軍副司令官表敬＞

Courtesy visit to Brig Gen Jesse Friedel, 5AF/Dept Commander

基地名の風景を眺めつつ、第５空軍司令部庁舎に到着。各人が２階のブリーフィング会場に移動、コーヒーなども用意されており、まずは各人長距離移動から一息入れることが出来た。その間、団長、両副団長、菊田理事が第５空軍副司令官ジェシー・フリーデル准将（Brig Gen Jesse Friedel, 5AF/Dept Commander）, 第５空軍参謀長ダニエル A. ロッシュ大佐（Col Daniel A. Roesch, 5AF/Chief of Staff）を表敬した。約 15 分間の懇談の中、周辺の安全保障環境への対応等について改めて言及されるとともに、副司令官が三沢基地司令官から着任したこともあり、三沢基地との違いなど終始和やかな雰囲気であった。

＜任務概要説明＞

コーヒーブレイクを終えた参加者が待ち受けるブリーフィング会場に移動。参謀長、第５空軍司令部 A6 部長岡本バート大佐 (Col Burt N.Okamoto, 5AF A6 Director)、第

5 空軍司令部 A4 ライアン・ワレンスキー大佐 (Col Ryan G.Walinski, 5AF A4 Director)、第 5 空軍司令部 A4 ジョナサン・マケロイ曹長 (MSgt Jonathan McElroy, 5AF A4) 同席のもと、まず副司令官による全般説明が行われた。その後第 5 空軍司令部副司令官付特別補佐官であり、毎回通訳を担当してくれているハタノ氏から、用意された日本語のスライド画面に従った丁寧なブリーフィングが行われた。原稿は事前に準備されていたそうで、英語を日本語に通訳する必要がないため、時間が短縮されるとともに、スムーズにブリーフィングを受けられた。

Briefing on the outline of 5th AF ↑↓

その後、参謀長から補足説明があり、質疑応答へと移った。研修参加者からの活発な質問を受け、副司令官以下それぞれの担任分野に関し適切かつ分かりやすい回答を得ることができた。

＜昼食会＞

第 5 空軍司令部の前で、副司令官以下第 5 空軍佐関係者と共に研修団の集合写真を撮った後、再びバスに乗り込み横田基地オフィサーズクラブに移動し、JAAGA 主催の昼食会が行われた。第 5 空軍・航空総隊司令部からの参加者計 20 名を加えた研修者は、円形の各テーブル 7 ～ 8 名ずつ 8 卓に分かれて席に着いた。

JAAGA hosted luncheon in the Yokota officer's club

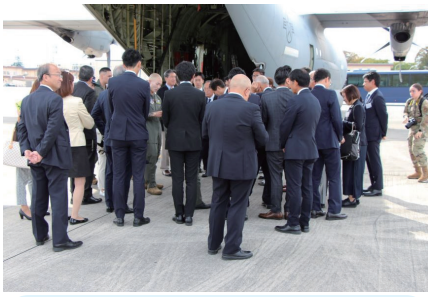
Opening remarks by Mr. Takahashi (Left) , Lt Gen Suzuki (Right)

団長のあいさつの後、航空総隊司令官鈴木康彦空将及び

Opening remarks by Brig Gen Jesse Friedel, 5AF/Dept Commander (Left) and closing remarks by Mr.Okabe (Right)

第 5 空軍副司令官にスピーチをいただき、菊田理事の乾杯から食事と歓談を楽しみ、岡部副団長のスピーチで締めくくられた。

＜航空機見学＞



Study of C-130J Super Hercules ↑↓

Study of RQ-4 Global Hawk

オフィサーズクラブからバスで向かったエプロンには C-130J スーパーハーキュリーズが駐機されており 3 名のパイロットが説明役として待機していた。C-130J に関する全般説明を受けた後、各人貨物室やコックピットに乗り込んで実機研修し、日本の C-130 との違いや性能の違いなど各人のおもいおもいの質問が飛び交った。集合写真撮影の後、バスに乗り込み少し離れた格納庫に向かう。バスを降りて格納庫に入ると駐機されていたのが RQ-4 グローバルホークであった。3 人の説明者が待機するなか、操縦者が主に全般説明を行い、質疑を受けていた。アメリカ本土から操縦するとの説明に驚きの声が上がっていたことが印象深い。

＜航空総隊司令部＞

航空総隊司令部庁舎に到着。航空総隊司令官鈴木康彦空将、副司令官影浦誠樹空将、幕僚長佐川詳二空将補に加え横田基地マスコットキャラクター「はやてくん」の出迎えを受け、写真撮影。その後会議室に移動し、防衛部長柳享範空将補による航空総隊の概況説明を受けた。我が国を取り巻く安全保障環境、航空総隊の組織、主要な任務、日

米同盟及び同志国との連携の各項目について約 30 分にわたりスライドを用いたわかりやすい説明が行われた。参加者は改めて厳しい安全保障環境と航空総隊についての理解を深められたようであった。

Briefing on the outline of Air Defense Command

若干の休憩を取った後、司令官による Q&A セッションが行われた。当初は講話をお願いしていたところ、一方的にお話しするよりもいろいろな疑問にお答えしたとのことで、このような形が実現した。参加者からは、防衛予算、将来への課題等の活発な質問がなされ、時間いっぱいの充実した Q&A セッションとなった。

Lt Gen Suzuki, ADC Commander in Q&A session

Tour Member asks a question to Lt Gen Suzuki

16 時過ぎにすべての研修プログラムをスムーズに終了し、横田基地のバスにより航空総隊司令部庁舎を後にした。その際、司令官以下、航空総隊司令部幹部の面々に手を振って見送っていただいた。

＜**解団式**＞

解団式が朝と同じ場所で行われ、団長と両副団長からたいへん有意義な研修を準備いただいた JAAGA の方々に感謝しますとの言葉をいただき、研修の幕を引いた。

Completion meeting at Fussa st.

改めて米第５空軍、航空総隊司令部の担当者はじめ研修をご支援くださった関係各位に感謝申し上げます。

（浅井理事記）

研修所感　　法人賛助会員　**株式会社IHIエアロスペース　細川　兼奨**

今回、初めて JAAGA 研修に参加させていただきました。横田基地内に入れる、普段見ることができないものが見られるだろうということで、非常に楽しみにしておりました。

実際に参加して、本当に思ってもいなかったほど近くで機体等を見せていただけて非常に驚きました。C130 については動く状態の機体の内部やコックピットまで見せて、触らせていただき、さらに米軍の方から直接ものを見ながらの説明をしていただくなど、非常に貴重な体験をさせていただきました。さらにグローバルホークも本当に間近で見せていただきながら説明をしていただけて、非常に驚くとともにうれしい限りです。

昼食会では、主に米軍の方とたわいのない会話を通じてコミュニケーションをとれたのはありがたい経験だったと感じています。また、空将という高官の方と会話する機会はまずないもので、貴重な時間を過ごさせていただきました。

航空自衛隊総隊の方の説明については、司令への質疑応答のせっかくの機会に手を挙げられなかったことは若干の後悔をしています。

もともと研修という名前から小難しく、長く感じるかと思っていた今回の研修ですが、実際に参加してみると思っていた何倍も楽しく、また貴重な体験ができました。終わってみれば短かったと感じるほどです。

今回の研修は多くの方のお力があって実施していただいたものであると感じており、貴重な体験をさせていただいた各所の皆様には感謝の念に堪えません。本当にありがとうございました。

研修所感　　法人賛助会員　伊藤忠商事株式会社　土山俊太

10 月 3 日 火 に JAAGA 横田基地 研修が実施され 、法人賛助会員の一人として本研修に初参加した。
自衛隊及び米軍 の方々にはご多忙な中ご協力いただき、非常に勉強になることが多く、また、本研修に参加する個人・企業関係者の方々とも親交を深めることでき、大変有意義な研修となった。

研修は、まず米軍第 5 空軍副司令である Brig Gen. Friedel を表敬訪問し、第 5 空軍の概要説明・質疑応答の機会を頂いた。 その後の Officers Club での昼食会では、円卓に日米各級指揮官のご臨席を頂き 、過去の任務のお話やプライベートについても話が弾んだことで、各卓で打ち解けることが出来たのではないかと感謝している。その後米軍機研修として、エプロンにて C 130J、格納庫にて Global Hawk(RQ 4) を見学した。 C 130J 実機を見る機会は初めてだったので、第 36 空輸航空団の隊員ともお話しながら H 型との違いを改めて実感した。最後に航空総隊司令部を表敬訪問し、概要説明を拝聴した後に鈴木司令官自らがお答えいただく貴重な質疑応答の機会も頂戴した。省内の組織編成から世界情勢についてまで幅広い事柄について我々研修団の質問にお答えくださり、感謝の念に耐えない。

部隊の方々との意見交換や基地での実機見学の機会は少なく、本研修は大変貴重で有意義なものであった。研修を通し、机上ではどうしても得られない情報や親交をこの度得ることが出来、現場・対面の利点を改めて実感するとともに、日米間で密接に糸を紡いできた協力関係を肌で感じることが出来た。今後の業務でも現場主義を徹底し、日本の安全保障に民側から寄与する一翼を担うことができるよう、日々の業務に邁進する所存である。

このような 貴重な 機会を設けてくださり、JAAGA 及び航空自衛隊、米空軍の関係者 には深く感謝申し上げます。

研修所感　　法人賛助会員　三菱プレシジョン株式会社　降簱 亮太

今回、初めて JAAGA 主催の米空軍横田基地研修に参加させていただきました。私事で恐縮ですが、防衛産業に携わってまだ 1 年足らずということもあり、横田基地研修は何から何まで貴重な体験で非常に有意義な時間でした。

正直なところ、携わって 1 年足らずの私のような一般の方と変わらない人間であると、自衛隊・米軍の情報はマスコミからでしか入手できないため、航空機の騒音や基地の移設問題等でマイナスなイメージも少なくありませんでした。しかし、今回の研修で「“ 日本 ” という国を守る」という、自衛隊と米軍が共に強い “ 信念 ” を持って任務にあたっていることを肌で感じることができ、一国民として “ 感謝すべきである ” という気持ちが強くなりました。

日々の活動において、自衛隊・米軍の方がどのような信念をもって、どのような想いで “ 日本 ” という国で任務に携わっているのか、私が肌で感じたことを少しでも多くの方に伝えていきたいと思っています。

また、第 5 空軍司令部の任務概要説明では、Okamoto 大佐殿からのサイバーセキュリティに関する話で、見えない敵から “ 国 ” を守ることへの使命、日々の任務内容、日米の連携の大切さを窺えました。我々も情報を敵に与えてしまう恐れがあるため、民側でも改めて共通認識が必要であると感じました。

今回の研修で、これまで以上に防衛産業に携わる民間企業の一員として、誇りを持ち、“ 日本 ” という国の力になれるよう、様々なことを経験・挑戦し続け、多くの知識をつけていきたいと強く思いました。

最後に、このような貴重なご機会をいただきました、JAAGA の皆様、航空自衛隊・米軍の皆様に心より感謝申し上げます。

第 18 戦闘航空団司令官交代式

Commander of the 18th Wing Change of Command Ceremony in Kadena

Brig Gen David Eaglin, middle, outgoing 18th Wing commander relinquished the 18th Wing guidon to Lt Gen Ricky Rupp, left

Lt Gen Ricky Rupp, left, passed the 18th Wing guidon to Col Nicholas Evans, middle, incoming 18th Wing commander

令和５年７月６日（木)、米軍嘉手納基地において在日米軍司令官兼第５空軍司令官リッキー・N・ラップ中将（Lt Gen Ricky N. Rupp, U.S. Forces Japan, and Fifth Air Force commander）の執行により第 18 航空団司令官（Commander of 18th Wing）兼嘉手納基地司令官の交代式が嘉手納基地第 353 特殊作戦航空団格納庫で執り行われ、デイビッド・S・エグリン准将（Brig Gen David S. Eaglin）からニコラス・B・エバンス大佐（Col Nicholas B. Evans）に指揮権が継承された。

交代式には沖縄県副知事、沖縄市長等関係自治体の長、第９航空団司令、海自第５航空群司令等自衛隊関係者も出席された。コロナの影響も少なくなったためか多くの方々が出席されていた。JAAGA からは沖縄支部長丸野が会長の代理として出席した。

Japan Self-Defense Forces attendees at the ceremony

交代式は、国家独唱、祈祷から始まり厳かに進められた。最初にラップ中将から、離任するエグリン准将の第 18 航空団司令官としての功績及び日米交流、基地周辺自治体との親善等の貢献に対する功績が称えられ、勲章が授与された。

続いて、エグリン准将からラップ中将に司令官旗が返還され、着任したエバンス大佐にしっかりと手渡され、指揮権が継承された。

離任されるエグリン准将は、周辺自治体、航空自衛隊をはじめとする自衛隊に対する感謝の意を述べるとともに、スタッフ、家族に対する感謝の意を述べられた。

新司令官エバンス大佐は、海外の基地では受け入れ国との関係が極めて重要であることを強調され、日米関係を重視するとともに地元との関係を重視する旨を述べられた。最後に「空軍歌」が斉唱され司令官交代式は終了した。

司令官交代式の後、下士官クラブで新司令官主催の懇親会が開催された。新司令官御夫妻は、入口で出迎えられ多数の方々と談笑されていた。

Commemorative photo at the reception. Col Evans and his spouse, middle and right, Mr. Maruno, JAAGA Okinawa branch chief, left

新司令官は、米国空軍大学を卒業後に任官、パイロットであり、F-16、F-35、T-38、T-37 で 2400 時間超の飛行時間を有しており、上級航空宇宙学校において、軍事戦略学博士号を取得している。ハワイ州ヒッカム空軍基地太平洋空軍司令部付き幹部補佐官からの着任である。

（丸野沖縄支部長記）

米空軍士官学校留学生支援「日光研修」

JAAGA supports USAF Cadets' NikkoTour on October 21 and 22

1　はじめに

JAAGA が実施する年度事業である防大留学米空軍士官候補生支援事業を今年度から担当することになった。先ずは担当理事として本事業を続けてこられた吉田会員、肥田木会員ご夫妻と共に防衛大学校から１セメスター留学生のホストファミリーとしての委嘱を受けた。米国等の大学は２学期 (セメスター) 制であり、約４カ月の秋学期に防大に留学してきている米空軍士官学校の士官候補生をホストファミリーとして支援することがそのベースとなる。

９月５日 (火) の初顔合わせにおいては、お互いの自己紹介を済ませた後、候補生たちは当日防大で開催されていた水泳大会に他の留学生（米陸・海軍、仏空軍からの留学生）と共に特別チームとして参加し、大会を盛り上げていた。

Swimming Competition at the NDA

例年３名の候補生が留学してくるそうであるが、今年度は日本との関係を重視した米側が４名の候補生（内１名が３学年、残り３名は４学年）を派遣してきたそうである。防大から様々な行事やイベントに招待され、候補生と接する機会を頂いているが、日光研修はホストファミリーとしても最も重要なイベントである。候補生が日本の文化や歴史等に触れ、日本に対する理解を深めると共に日光研修を支援して頂いている現地関係者との絆を深める貴重な場でもあるからだ。

2　日光研修

（１）第一日目　10/21 (土) 【日光東照宮等研修】

当日、候補生４名と東京駅丸の内口の外で待ち合わせた。既に到着している様子であることはラインで確認できていたが、なかなか姿を見せず心配していた時、写メで GPS の現在地を送ってきた。待ち合わせ場所の確認にもスマホを使う若者の対応に若干戸惑ってしまった。

In front of Tokyo Station

東京駅周辺は週末であり天候も良好であったことから大勢の外国人観光客で溢れていた。改めてコロナの行動制限が解かれ、コロナ以前の状況に戻りつつあることを実感した。吉田会員から東京駅の耐震構造などについて詳しく説明して頂いた後、出発前の集合写真を撮って東北新幹線入り口に向かった。

東京駅から宇都宮駅までの新幹線ではホストファミリーを含めて総勢８名まとまって指定席に座った。シートを回転させ、向かい合った状態で色々な話をしたが、英語と日本語の入り混じった会話が響き、やや特異なグループとして目立っていたかもしれない。

In the Tohoku-Shinkansen to Utsunomiya

宇都宮駅では、堀川様や現地で支援して頂く星の杜高校の佐藤先生と４名の学生の方々が日米の国旗とエスコートする候補生の名前を書いた手書きのボードで出迎えてくれた。研修期間中、１対１でエスコートしてくれる高校生と候補生は、当初、自己紹介をする間はややぎこちなく感じたが、バスに向かうまでには直ぐに打ち解けてきた様子であった。

Welcomed by students of Hoshinomori-High School at Utsunomiya Station

その後、バスに乗車し最初の目的地である金谷ホテルに向かった。金谷ホテルは日本最古のリゾートホテルとして有名なホテルで、木造洋風の建物の中に飾られていた著名人が写った白黒の写真の多くが時代を感じさせてくれた。候補生と学生は４名づつの二組でテーブルを囲み、美味しいランチを楽しみながら会話が弾んでいる様子であった。紅葉が始まった景色を望める絶好の場所を予約頂いたことも会話を弾ませる要因であったように思う。

Good smiles over wonderful lunch

その後、金谷ホテ

ルの庭園を散策した後、徒歩で日光東照宮へ向かった。天候も良く数多くの外国人観光客が訪れており、入場券売り場でも大混雑であった。エスコートしてくれる学生の皆さんは、日光東照宮の見どころを予め調べて英語で説明できるよう準備してくれており、「三猿」や「眠り猫」等、熱心に説明してくれていた。表現が難しかったり、単語が出てこない場合は、候補生が助け舟を出すなど、更に打ち解けてきている様子が微笑ましかった。約２時間ほどの日光東照宮の研修の間、エスコートの学生と候補生の楽しそうな会話が途切れることは無かった。

Group photo at the garden Kanaya-hotel. Escorting student explain ”Three Monkeys”of Nikko Toshogu

エスコートする学生の英語の勉強の場でもあるので、候補生には極力英語で会話するように事前にお願いしていたが、上手く伝えられない時には候補生は日本語で、学生は英語と日本語を混ぜて会話したり、時にはスマホで補足するなど、お互いのコミュニケーション能力を高める良い機会であったと感じた。

Never-ending chats on the bus

東照宮の研修を終えホテルに向かうバスの中でも、学生と候補生は通路を挟んで隣に座り、前後のペアを交えての会話が更に弾み、笑い声が絶えなかった。

ホテルに到着後、学生たちは一旦帰宅し、候補生とホストファミリーは高柳様主催の夕食会に参加した。候補生を含めて全員が自己紹介を終えた後は、高柳様の奥様からご主人が撮影した星の写真や JAAGA との繋がりを示す航空関係者とのお写真などを見せて頂き、長年に渡りご支援頂いていることを改めて感じた。

Dinner with Mrs. Takayanagi and Mr.& Mrs. Horikawa

星の杜高校の石塚学校長も参加され、研修に同行された佐藤先生と同様に、エスコートする生徒にとってこの日光研修支援プログラムは英語能力や異文化交流の極めて貴重な機会であること、年々希望者が増えて選考するのが大変になっているものの是非とも継続して欲しいことなどのお話を頂いた。過去の関係者の方々の努力の賜物であり、JAAGA にとっても貴重なプログラムである旨をお伝えした。

At the downtown of Utsunomiya-city

その後、育ち盛りで元気一杯の候補生たちは、若干眠そうなホストファミリーと共に二次会に向かって夜の宇都宮の街に消えていった。

（２）第二日　10/22（日）【大谷資料館等研修】

爽やかな晴天の下、二日目の日程が始まった。当日の予定に合わせて候補生、学生共に動きやすいカジュアルな服装で集合し、前日と同様にバスの中での会話を楽しみながらリンゴ農園へと向かった。候補生、学生共にリンゴ狩りが初めての者が多く、皆、農園の方のリンゴや摘み方に関する説明に興味津々で耳を傾けた。その後、食べごろに慣熟した数種類のリンゴを各自思い思いに収穫していた。

To reach a better apple

自ら摘んだリンゴを計量し、お土産用に購入した後は、リンゴの試食を楽しんだ。皮付きのままかぶりつく候補生もいれば、皮むきが間に合わないほど次々に頬張る学生等、和気あいあいと試食を楽しんでいた。リンゴ農園のご厚意で食べきれないほどの試食用リンゴを頂き、結果的に食べ放題を満喫することとなった。

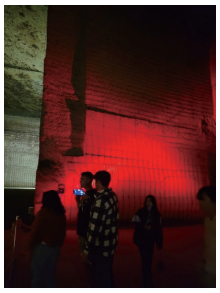
All you can eat for free ?

お腹一杯になった一行は再びバスで大谷石採掘場跡の大谷資料館に向かった。大谷石は宇都宮市北西部の大谷町付近一帯で採掘される軽石凝灰岩（火山灰が堆積してできた岩石）である。柔らかく加工がしやすいことから古くから外壁や土蔵の建材として利用されてきた。実際、バスで通り過ぎる道路沿いの土塀や家の外壁に大谷石が使われている様子を確認することができた。操業を終えた採石場跡に残る広大な地下空洞を観光・学習施設としているのが大谷資料館である。

地下数十メートルに広がる広大な空間には、手掘りと機械掘りの跡や人力で運び出していた足場の跡が残されていた。先の大戦時には中島飛行機が製造した「疾風」のエンジン部品の倉庫として使用されていた史実を示す写真も展

示されており、非常に興味深かかった。この他、地下空洞はワインや日本酒の貯蔵・熟成に使われたり、映画や CM の撮影に使われたり、更には生け花などの展示会などにも使用される等、多様な用途で活用されていることに驚いた。候補生と学生は、幻想的な照明でライトアップされた地下の広大な空間とそこでの会話を十分に楽しんでいた。

Like stage underground space in Oya Museum



Light up illusion

大谷資料館に隣接する BBQ 場に徒歩で移動して二日目の昼食となった。途中、大谷石の岩肌に作られたボルダリング体験用の壁に果敢にチャレンジする者もいた。BBQ 場では火起こしからお肉を焼くところを「昔取った杵柄」でホストファミリーが担当し、候補生と学生は専らおしゃべりと食べることに専念していた。リンゴ狩りの試食でお腹一杯のはずが、結局、お肉の追加注文をするほど食欲旺盛な若者たちであった。

Eating and Chatting only ?

Full of smiles after BBQ lunch

BBQ 後、バスで宇都宮駅に向かい二日間の日程を終えた。宇都宮駅でエスコート学生とお別れとなったが、初日の出迎え時のぎこちなさは完全に消え、別れを惜しみつつも最後まで記念撮影に笑顔が溢れていた。帰路の新幹線の中で、エスコート学生から手渡されたお土産や心のこもった手書きのメッセージを読みながら候補生たちは大いに感激していた。改めてエスコート学生への感謝の気持ちを強くすると共に本プログラムの意義を感じていたことと思う。吉田会員、肥田木会員ご夫妻とは上野駅で別れ、東京駅で横須賀に向かう候補生たちを見送って本プログラムを終了した。

See off at Utsunomiya station

Mr.&.Mrs. Hidaki see cadets off at Ueno station

3　おわりに

日光研修に関わる企画・調整はほぼ全て堀川様が中心となり星の杜高校関係者と共に準備されたものである。候補生や学生にとって楽しく意義深い研修となるよう細部まで配慮されており、堀川様並びに星の杜高校の関係者の方々に改めて感謝申し上げたい。また、エスコートしてくれた 4 名の学生にも深く感謝したい。彼女たちは全行程を英語で説明できるよう事前に準備すると共に、バス移動間にはお茶やお菓子の詰め合わせを準備してくれたり、細やかな心配りに感動した。また、英語での説明を事前準備したノートを見ることなく自らの言葉で伝えようと努力するなど、エスコートの要領も年々工夫しながら行っていると伺った。星の杜高校にとっても貴重な英語学習や異文化交流の学びの場として定着しつつあること、堀川様がご両親から受け継いでいる航空関係者を支援し絆を深めるという想いを具現化できていること、JAAGA にとっても米空軍士官候補生を支援することを通じて日米同盟の礎となる人的ネットワークを強化する草の根活動の一助となっていること等、三者にとって「Win-Win-Win」の関係を作り出している本プログラムに携ることが出来て大変嬉しく思う。

改めて高柳様、堀川様、星の杜高校の関係者の皆様、JAAGA 吉田会員、肥田木会員ご夫妻に感謝したい。引き続き本プログラムがより良いものとなるよう担当理事として努力していきたいとの決意を新たにした。

Cadets and escorting students taking picture together

（荒木〔淳〕理事記）

作：宇山 OB

SPORTEX '23-A

JAAGA holds SPORTEX '23-A, JAPAN-U.S. friendship golf athletic meet on November 15

Smiling great players in front of renewal clubhouse

ようやくコロナ以前の社会生活が戻ったものの、厳しい残暑に早く秋めいて欲しいと願う日々であったが、一気に残暑が収まった 11 月 15 日（水）、多摩ヒルズゴルフコースにおいて「SPORTEX '23-A」が開催された。心配された天候は曇りがちではあったが時には日差しもあり、風も弱いというまずまずのコンディションの下、JAAGA 会員 32 名（正会員 26 名、個人賛助会員 6 名）、米空軍関係者 18 名にボランティア 3 名を合わせた総勢 53 名が集った。コロナ以前に設定されていた朝食は省かれたものの、全員揃っての開会式、ショットガン形式による競技、リニューアルされたクラブハウス 2 階カフェテリアでの昼食、同所での表彰式といった従来の流れで実施された。

開会式は、上ノ谷理事の軽妙な司会進行により進められ、丸茂会長とフリーデル第 5 空軍副司令官（Brig Gen, Deputy Commander, 5AF）から「スコアは二の次」とし、「日米参加者の友情を深める」ことに重点を置き、思う存分楽しもうとのお言葉を頂いた。競技説明に続き、リニューアルされたクラブハウスをバックに笑顔で記念写真に納まった参加者は、日米パートナーでカートに乗り込み、和やかに会話しつつスタート・ホールに向かった。スタート時間に合わせ各ホール一斉に競技開始となり、そこかしこで歓声（悲鳴？）が上がり、熱戦が繰り広げられた。また、プレー後には大きなハンバーガーと山盛りのポテトを食べながらゴルフ談議に花が咲き、多くの賞が用意された表彰式は大いに盛り上がった。

MC Kaminotani (left), Opening remarks from JAAGA President Marumo (middle) and Brig Gen Friedel (right)

競技結果は、大石美智子さん（賛助会員）が見事優勝（GRS 82 / NET 71.2）、準優勝はマッカロイさん（Col Dave "MAC" McAlroy, 5AF / A3）（GRS 104 / NET 71.6）、第 3 位はヘンドレンさん（Civilian Mr. Harley Hendren）（GRS 73 / NET 71.6）であった。優勝者には「バックパック」、準優勝者には「ゴルフ用ポーチ」、第 3 位には「多摩ヒルズ ゴルフキャップ」が授与された。

***"Winner"*, Mrs. Oishi**

"2nd place", Col McAlroy

丸茂会長賞は「一番日米友好に尽くした方」即ち「米軍の最多打数者」とされ、今回「コースデビュー」だったマケロイさん

"3rd place", Mr. Hendren

"JAAGA President prize"*, MSgt McElroy, *"The Most Shots"

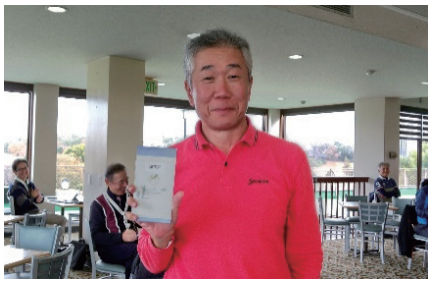
"5AF Commander prize"*, Mr. Muto, *"The 5th Place" JAAGA member

"11th prize", CMSgt Aiello

"15th prize", Mr. Arimura

"22nd prize", Col Roddan

"30th prize", Lt Col Richard



"33rd prize", Mr. Nishimura

"44th prize", Brig Gen Friedel

"45th prize", Mr. Kaneko

"Booby prize", Maj Hawkins

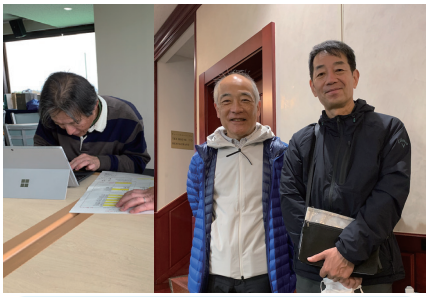
(MSgt Jon McElroy, 5AF/ A4) が受賞し、「参加前は不安でしたが楽しくプレーできました」とコメントし、はにかみながら「江戸切子のグラス」を受け取った。

一方、５空軍司令官賞は「『５』空軍に因んだ日本人５位の方」とされ、武藤さんが受賞し、満面の笑みで「ウィスキー」を受け取った。

また今回は、11 月 15 日開催に因んで「11」と「15」の倍数の順位に「飛び賞」が設定され、11 位のアイエロさん（CMSgt Sean Aiello, 5AF Senior Enlisted Leader)、15 位の有村さん、22 位のラダンさん（374AW/CC Col Andrew Roddan)、30 位のリチャードさん（Lt Col Dan Richard, USFJ/J2X)、33 位の西村さん、44 位のフリーデル副司令官（BG Jesse"AMMO"Friedel, 5AF/CD)、45 位の金古さんが受賞し、「商品券」を手にした。

なお、ブービー賞は、ホーキンスさん（Maj Bob Hawkins, 5AF/USFJ CAG）が受賞した。

今回も素晴らしい日米交流の機会となったが、本コンペの計画・運営に当たった理事各位、特にボランティアとしてプレー抜きで現場調整や臨機の対応、受付や会計、成績集計などを担当された上ノ谷、井上、大岩の３名の理事、また、毎回最良の環境を提供して頂いている多摩ヒルズゴルフコースの関係者の皆様に改めて感謝を申し上げたい。



Volunteer Directors, from left, "Rush Score Typist" Oiwa, "Hare-Otoko MC" Kaminotani and "Gentle Receptionist" Inoue

次回の SPORTEX '23-B は、令和６年３月 20 日（水）春分の日に実施されるとのことであり、計画担当者からは「初心者でも全く問題なく楽しく日米交流を楽しめ、賞品も初心者でも獲得できる」というコンセプトの下実施するとのことであり、JAAGA 会員はもちろんのこと、米空軍の皆さん、お誘いする自衛官の皆さんにも奮って参加していただき、楽しい癒しのひと時としていただきたい。

（太田理事記）

スペシャルオリンピックス支援
JAAGA supports Special Olympics

三沢基地
Misawa AB

10 月 21 日（土）三沢基地日米空軍親善協会主催のの第 35 回スペシャルオリンピックスが開催され、米軍三沢基地の格納庫内で開会式が行われた。

Opening remarks made by Col Michael Richard,35FW commander, October 21

参加者は、三沢基地周辺の東北地方の団体や中学校などで、サッカーやイベント競技で大いに盛り上がった。選手は約 150 人が参加し、ボランティアや大会関係者も多数集まり、新型コロナの制限を全面解除した競技で活気溢れた大会になった。

Participants from Misawa local and U.S.

日本側からは、第 3 航空団と日米エアフォース友好協会（JAAGA）が招待された。開会式前に関係団体へ第 35 戦闘航空団司令官リチャード司令官（Col Michael Richard, 35FW commander）から支援に対する表彰があった。その後、開会式が行われ、リチャード司令官から選手への激励とボランティアや関係者に対する感謝の言葉があった。

35FW commander commends JAAGA for its long years contribution to the Special Olympics

スピーチの中で「長年にわたり JAAGA から支援を頂き大変感謝している」とのコメントをいただいた。大会競技は入場パレード、聖火点火につづいて始まった。

最後は司令官からアスリートへの激励が行われ最高の盛り上がりの中で終了した。

（池添三沢支部長記）

横田基地
Yokota AB

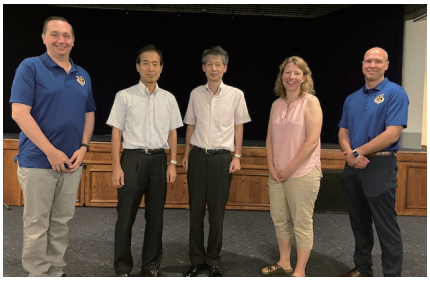
【ブレックファストミーティング】

9 月 16 日（土）、米空軍横田基地において関東地区スペシャルオリンピックスの事前調整会として「ブレックファストミーティング」が実施された。冒頭、基地司令の代理として第 374 空輸航空団の副司令官ブレット・コクラン大佐（Col Brett W. Cochran, Vice Commander of 374AW）から、参加者への歓迎の意とスペシャルオリンピックスの意義等について語られ、会が開始された。

Col Brett W. Cochran, Vice Commander of 374AW, delivers the opening speech, September 16

“YOSAKOI”dance performed by Operations Support Wing members

最初に、空自退官後第 374 空輸航空団においてスペシャルオリンピックスの主担当としてリーダーシップを発揮していた秋元洋一（元）准空尉が今春病死されたことに鑑み、故人を偲ぶメッセージが贈られた。その後、ボランティアによるフラダンス、作戦システム運用隊副司令以下有志による「ヨサコイソーラン」が披露されて、会は和やかに進められた。



JAAGA members with Commander’s wife and Vice Commander, right, and 374th Mission Support Group Commander, left

会の最後には、スペシャルオリンピックスの創設から、当関東地区における活動の歴史等が紹介さ

れ、参加者一同、本活動の規模、その意義、更には関東地区の活動とこれを支えるボラティアの重要性についても改めて認識を深くさせられた次第であった。そして、実行委員会副委員長ルイス･トラレス (Luis Torales) 氏の「皆さん、11 月 4 日に会いましょう！」の掛け声で閉会となった。

（川口理事記）

【関東地区スペシャルオリンピックス】

11 月 4 日（土）、横田基地内ボンク・フィールドで第 44 回関東地区スペシャルオリンピックス (以下「KPSO」という。) が開催された。アスリート達の様々な能力を高め自信と勇気を持つことにより心と体を成長させることを目的とした KPSO は、さわやかな秋晴れの下、基地内及び近隣の施設から招待された多くのアスリートが集い、米空軍ボランティア、地域ボランティア、陸海空自衛隊から約 460 名の准曹会員等がボランティアとして参加し各種競技を支援しながら共に楽しんだ。

Athletes coming into the field in Yokota Air Base, November 4

Air balls release into the blue sky just after the Olympics Torch lit

大会最高委員長の第 374 空輸航空団司令官 Col Andrew L. Roddan が「KPSO は横田基地と地域の皆様との絆を象徴する一つの活動であり、日米相互に共有する思いやりと助け合いを示す良いイベントです。今日はアスリート一人ひとりがスポーツに対する情熱と日ごろの成果を発揮してくれるでしょう。選手の皆さん、応援しています。今日は一日思う存分楽しんでください。がんばって」と挨拶された。

引き続き日米の選手代表が宣誓し、選手一人ひとりをリレーした聖火トーチは聖火台までつながり、点火と同時に色とりどりの風船が真っ青な大空に放たれ第 44 回 KPSO は開会した。競技種目は、50、100、200、400 m 走、バスケット、立幅飛び、ソフトボール投げ、フライングディスク、サッカーシュート、水泳、ボーリングなど充実しており、全てのアスリートは果敢に挑戦していた。

KPSO は、1980 年に米国防省所属学校ドッズ USA 横田基地から、わずか 3 名の生徒が参加して発祥した日本で初めて組織されたスペシャルオリンピックスであった。

JAAGA provided support funds as an official sponsor of the Olympics

JAAGA は、大会 Official Sponsors の一員としてサポートしており、今回は川口、村田、藤田、朝倉 4 名の理事が開会式に出席した後、ボランティアとともに各種競技に参加するアスリートを応援した。

通常規模の開催となった今年は、全国の基地・駐屯地から大会ボランティアとして参加した隊員も直接サポート要員としてアスリートと直接接する機会があり、「アスリートから教えられることが沢山ある」と感想を述べていた。

（朝倉理事記）

作：宇山 OB

JAAGA グッズの紹介

日米現役の皆さんを応援する「JAAGA だより」を更に多様性に富んだ充実したものにするために、会員の皆様の投稿を募集しています。投稿頂いた方には記念として、「JAAGA グッズ」（男性にはタイピン、女性にはピンブローチ）を謹呈させていただきます。

JAAGA 広報係

米空軍将校 航空自衛隊勤務だより

Letter from USAF Officer Working in Koku-Jieitai

第４術科学校　第一教育部

4th Technical School, 1st Education Division

Capt James J Ao

はじめまして。

航空自衛隊熊谷基地第４術科学校でサイバー作戦教官として勤務しているアオ・ジェームズと申します。2015 年に米空軍に入隊し、専門は「サイバー攻撃」です。2021 年 1 月に来日し、現在、新潟出身の妻と元気な息子２人と暮らしています。来年には横田基地に異動する予定です。

Family photo

領域横断作戦の中で、サイバーが最も不明瞭な領域と言えるかもしれません。また、日本はまだ近隣諸国と同規模のサイバー作戦能力を持っていないかもしれません。今回は、サイバー攻撃とその長所と短所について私の意見を紹介させていただきます。

サイバー攻撃とは、何でしょう？　一言で言えば、司令官の目的達成を支援するためにネットワーク上で行われるコンピューター操作のことです。特に、サイバー攻撃の目標は、情報の収集、データの破壊、通信の妨害などです。イランの核施設設備を破壊したスタックスネット (Stuxnet) に見られるように、システムを物理的に破壊することも可能です。

サイバー作戦には、空軍の他の兵器と比べていくつかの利点があります。その利点の一つは、情報収集の手段として優れているツールであるという点です。私たちのコンピューター、サーバー、携帯電話などには膨大な情報が保存されていることは誰もが知っていると思います。特に携帯電話は、地理的位置の特定に利用できる信号を発しています。ウクライナ紛争では、ロシア軍の動きを追跡することを目的として、ロシア軍が使用している携帯電話から発信される信号を探知するドローンが使用されています。また、サイバー攻撃は巻き添え被害が少ないということも利点として挙げられます。例えば、爆弾を使用して敵の発電所を機能停止させた場合、発電所の周辺地域で民間人に死傷者が出る可能性が高くなります。一方、サイバー攻撃の場合、死傷者を出すことなく、発電所の機能を停止させることができます。さらに、サイバー攻撃の実行者の特定が不明確であるため、ある国が内密に攻撃を行った際、非難されても無実を主張することができます。

しかし、サイバー攻撃には欠点もあります。通常兵器とは異なり、サイバー攻撃は秘密主義に大きく依存するため、紛争を防ぐ抑止力としては有効ではありません。通常兵器であれば、自国に反撃能力があることを示すことで戦争を抑止する効果が期待できます。サイバー攻撃の場合、敵が気づいていないネットワークの脆弱性に依存するため、その存在を示して敵を威嚇することはできません。もし敵がサイバー攻撃を発見すれば、自国のネットワークの脆弱性に気づき、それを修正してしまうため、サイバー攻撃の効果がなくなります。つまり、紛争を抑止するためには、サイバー兵器の存在を敵に示す必要がありますが、それは同時に、サイバー兵器を無力化するための情報を提供することと同義です。また、サイバー兵器を機能させるためには特定の条件が揃う必要があり、他方、攻撃の有効期間が長くはない特徴を併せ持っています。米国サイバーコマンドの司令官によれば、保管されている通常兵器は、長期間経過しても効果を発揮することができますが、サイバー兵器はわずか 6 か月程度の期間しか使用することができない可能性があるそうです。このため、サイバー兵器を継続的に開発し、改善する必要があります。

この文章を通じて一番お伝えしたかった点は、読者がサイバー兵器について正しい理解を持ち、それらの開発を日

本の防衛に役立てて欲しいということです。サイバー兵器が攻撃を抑止する能力には議論の余地がありますが、実際に情報収集の重要な手段となり得ます。近年の紛争でも、情報の重要性が明らかになっています。例えば、ウクライナがロシアの侵攻に対抗できた一因は、侵攻を予測する情報を数か月前に入手したからです。それに対して、ハマスによる攻撃をイスラエルの情報機関が予測できなかったことが、何百人ものイスラエル市民の死亡につながったと思います。自衛隊がサイバー防衛能力を大幅に強化している今、サイバーを情 報収集に活用することも念頭に置きつつ強化することが、日本の防衛に有益であると考えています。

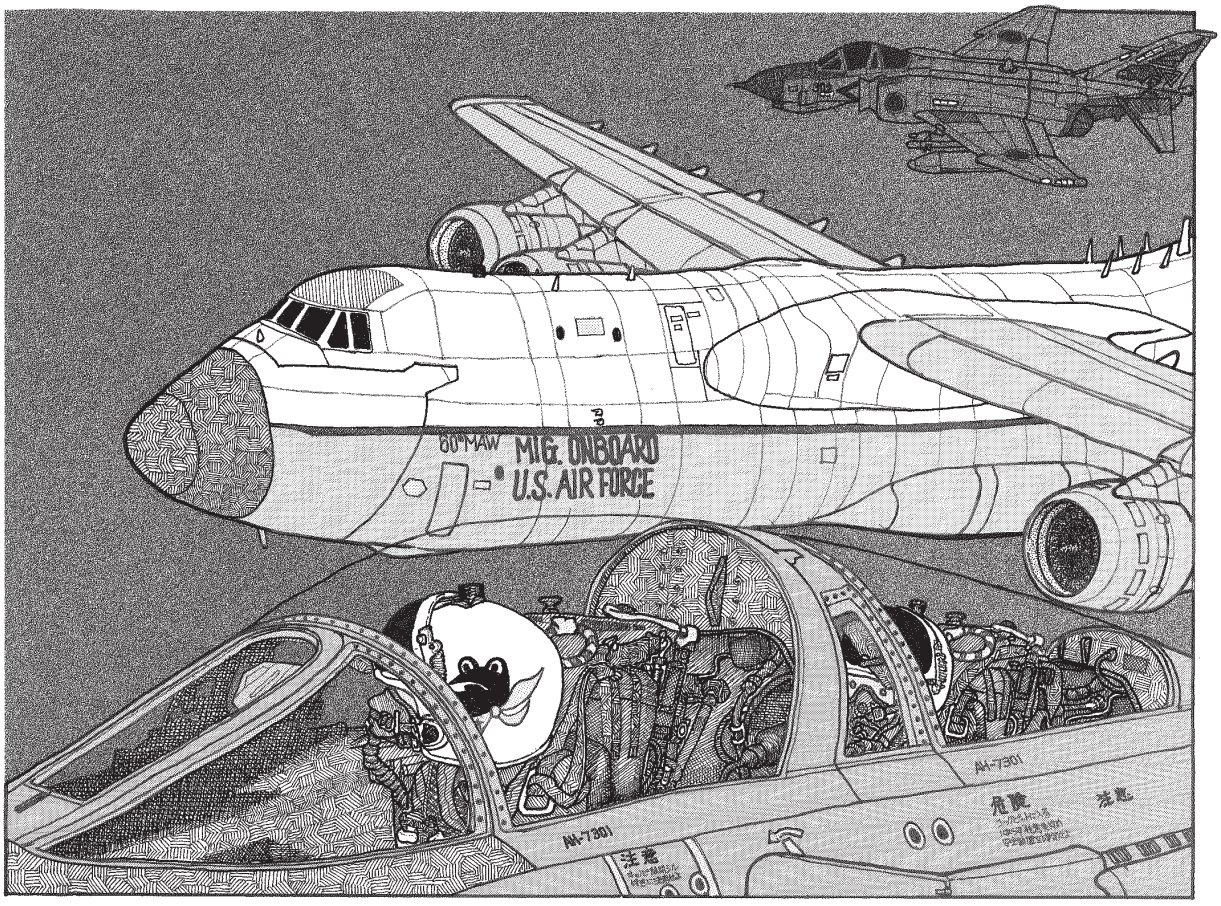
＜Topics of living in Japan＞

Taiko performance at New Year's party

Trip to Yokota AB with students

Winning first prize at the Kumagaya speech contest

Karaoke night with friends



"MIG ON-BOARD"

JASDF 百里基地への飛行

作：富岡幹博　会員

＜モチーフ＞

米ソ冷戦時代の 1976 年 9 月 6 日、ソ連のベレンコ中尉が搭乗する MIG-25 戦闘機が日本の領空を侵犯し函館空港へ強行着陸した。防衛庁は、米空軍の協力を得て C-5 輸送機に MIG-25 を分解して載せ百里基地へ運び、必要な調査を行った。

航空自衛隊コーナー
From Koku-Jieitai

寄稿　米空軍主催多国間共同訓練シルバーフラッグ

Koku-Jieitai participates in Silver Flag exercise hosted by PACAF at Andersen AFB

空幕防衛部施設課　３等空佐　勝田　智大

航空自衛隊は、８月７日（月）から 11 日（金）までの間、米国グアム準州アンダーセン空軍基地において実施された「米空軍主催多国間共同訓練シルバー・フラッグ（Silver Flag）」に隊員を参加させた。

Commemorative photo with a powerful explosion in the background

「シルバー・フラッグ」は、米空軍が主催する、被害を受けた飛行場の復旧に関する訓練であり、訓練自体の名称または、本訓練が行われる訓練場の名称でもある。同名の訓練場は、アンダーセン空軍基地の他、フロリダ州ティンドル空軍基地及びドイツのラムスタイン空軍基地に存在するが、中でもアンダーセン空軍基地が最も充実した訓練環境を有すると言われている。

Japanese and Australian members restore the runway

航空自衛隊は、被害復旧能力の向上や米空軍を始めとする各国空軍との相互理解の促進を図る機会として本訓練に参加している。今年度はアメリカの他、オーストラリア、カナダ、インドネシア、フィリピン、韓国、シンガポール、スリランカ及びイギリスから施設職域隊員総勢 150 名余りが参加した。

航空自衛隊は、平成 27 年度から参加しており、今回が７回目の参加になった。米国以外からの参加国としては、参加規模が最も大きく（約 20 名）、航空自衛隊の存在感を示すことができた。また、本訓練の参加国及び参加者は、年々増加しており、今年度は、米空軍のみならず米陸軍、米海軍及び米海兵隊の工兵部隊からも隊員が参加する等、国及び軍種を超えた施設職域の訓練・交流の場となった。

本訓練においては、いかなる被害を受けたとしても、航空基地を運用し続けるために「指揮所活動訓練」、「飛行場被害復旧訓練」、「消防訓練」及び「不発弾処理訓練」について、それぞれ訓練を行った。特に「飛行場被害復旧訓練」においては、使われていない古い滑走路を丸ごと訓練区域としており、滑走路に開いた複数の穴を速乾性のコンクリートで埋め戻す等、より実相に近い被害様相の設定の中で訓練を実施することができた。

参加国の隊員は、豊富な経験と装備を有する米空軍の被害復旧技法や重機等の装備品の操作方法を学び、迅速に被害を復旧するための技量を修得・向上させるとともに、参加隊員が日ごろの各国空軍における訓練で培った技量を披露しあった。

A group of tents where the participating members slept

また、参加隊員の訓練期間中の生活については、飛行場の被害が生じている状況や展開直後で十分な後方支援機能が確立していない生活環境を模しており、同訓練場内のテントに寝起きし、食事は毎食 MRE（戦闘用糧食）を喫食した。厳しい訓練環境下でも、航空自衛隊からの参加隊員は、隙間時間を見つけて積極的に他国空軍との交流を行い、個人間レベルでの相互理解、信頼関係の構築を図った。

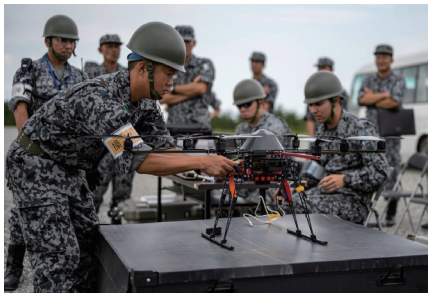
近年、施設職域においても無人化の波が押し寄せており、航空自衛隊においても滑走路の被害状況調査に無人機を活用するための訓練を行っている。多くの空軍においても同様の無人機の導入・検討がされており、今後施設職域においても、最新技術の更なる普及が見込まれる。

一方で、参加者からは、国や話す言葉が異なっていても「職人」としての「技術」や「姿勢」は世界共通であ

り、施設の共通言語である「自身の腕」で意思疎通を図ることができたとの力強い感想を聞くことができた。

Koku-Jieitai personnel operating heavy machinery

いかに高度な技術を導入しても、それを適切に使いこなす「職人」がいなければ、任務遂行に寄与することはできない。航空自衛隊の施設職域においては、今後も最新技術の積極的な活用と職人としての誇りを胸に、我が国の防衛の一翼を担っていく所存である。



The UAV also contributes to the survey

米空軍コーナー

From 5th Air Force

Generate Airpower, Check: Kadena ACEs no-notice exercise

https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/3537475/generate-airpower-check-kadena-aces-no-notice-exercise/

嘉手納基地で 2023 年 9 月 22 日、第 18 航空団が予告無しに迅速機敏な戦闘展開訓練を実施し、米空軍が迅速に航空戦力を発揮させる能力が試された。

第 18 航空団の隊員は、シーモア・ジョンソン空軍基地（ノースカロライナ州）、マウンテンホーム空軍基地（アイダホ州）、エイルソン空軍基地（アラスカ州）から派遣された隊員と連携し、複数の F-15C/D イーグル、F-15E ストライクイーグル、F-35A ライトニング II を予告なしに発進させ、基地の迅速な航空戦力発揮・分散能力をテストした。

F-15E Strike Eagle assigned to the 391st FS, Mountain Home AFB, Idaho taxis past an F-35A

「ACE は、生存能力を高め、敵のターゲティングを複雑にするために、大規模で集中的なハブ基地から小規模で分散した拠点に航空機を迅速に動員するチームの能力に依存している」第 18 航空団副司令官のジョシュア・ルンデビー大佐は述べ、「このような訓練を通じて、我々は、地域の安定、わが国、同盟国やパートナーに対するいかなる脅威をも抑止し、拒否し、打ち負かす態勢を維持している」と付け加えた。

隊員は、嘉手納の多種多様な戦闘機を、あたかもスポークされた拠点に分散させるかのように、準備を整え、発進させる任務を負った。戦闘機がタキシング、あるいは予定されていた通常訓練のために発進すると、「出発」したと評価された。

この訓練は、作戦、整備、支援の各分野にわたる米空軍の能力を実演するものであった。「これは小さな偉業ではなく、我々は世界中の 4 つの異なる戦闘機整備部隊から高度な技術を持つ隊員を集め、安全、適正かつ効率的な ACE に取り組むよう求めた」と 18 整備群司令官ランディ・シュウィンラー大佐は語り、「彼らのパフォーマンスを非常に誇りに思う」と付け加えた。

F-35A pilot assigned to the 355th Fighter Squadron, Eielson AFB, Alaska, places an American flag in his cockpit

太平洋の要として、嘉手納の戦略的な規模と位置は、日本の防衛と自由で開かれたインド太平洋を確保するための極めて重要である。この演習のような実戦的な訓練を通じて、嘉手納の隊員は、米国とその同盟国やパートナーに対し変化していく脅威対応するために必要なスキルを磨いている。

「このような訓練は、隊員に能力を磨く力を与えることで分散した戦力運用を可能にし、作戦の効率を高めながら、新しい技術を革新したり適応させたりする機会を提供する」とシュインラー大佐は付け加えた。

嘉手納基地は現在、F-15C/D イーグルという由緒ある

戦闘機隊が段階的に退役するまでの間、途切れない戦闘機運用能力を確保するため、空軍全域から配備された戦闘機部隊を受け入れている。

同じ基地で異機種戦闘機を運用することは、チーム嘉手納にとってユニークな課題であるが、同時に訓練や作戦準備態勢を強化する重要な機会でもある。

第 18 作戦群司令官のヘンリー・シャンツ大佐は、「この戦域に戦闘機が揃うことで、地域のパートナーと協調する機会が増える」、「このように戦闘機と ACE を組み合わせることで、戦略的な優位性を高め、最終的には日本とインド太平洋地域の防衛における戦闘能力を強化することができる」と述べた。

（浅井理事仮訳）

US, Japan Guard and Protect 2023

https://www.5af.pacaf.af.mil/News/Article-Display/Article/3584624/us-japan-guard-and-protect-2023/

一国による施設防衛に勝るものがあるだろうか？それは、2 つの国が協力することである。

第 374 憲兵中隊の隊員は、陸上自衛隊と航空自衛隊の隊員とともに、2 週間にわたり、現実味あるシナリオで必要な能力を磨く、基地即応訓練「ビバリーモーニング (Beverly Morning)24-1」を行った。

A Japan Ground Self-Defense Force soldier carries a simulated wounded U.S. Air Force Airman

横田の隊員は、航空自衛隊作戦システム運用隊および陸上自衛隊第 1 師団の隊員とペアを組み、想定状況下、横田基地施設を守る共同した部隊能力をテストした。

「（第 374 空輸航空団と）横田に共同配備されて以来、ビバリーモーニング演習にこれほど深く関わるのは今回が初めてです」と、航空自衛隊作戦システム運用隊警備部門長の大久保英一 1 等空尉は述べた。「この米空軍訓練をやり遂げたことを誇りに思う。なぜなら米空軍と緊密に連絡を取り合いながら、迫り来る脅威に共に対処したからだ」。

Japan Air Self-Defense airmen and a Japan Ground Self-Defense Force soldier share information

厳しい状況下ではコミュニケーションが重要だが、米軍と同盟軍との間には言葉の壁があり、連携した作戦行動が困難になることがある。この課題に対処するため、第 374 憲兵中隊は一貫して、年に何度も防衛戦術、技術、手順について航空自衛隊および陸上自衛隊の警備要員と訓練を行っている。「我々にはもはや言葉の壁感じていない」。第 374 憲兵中隊の標準化・評価責任者であるディアメトリス・マクラニー曹長 (Master Sgt. Deametrice McCranney)。また「私たちは彼らと頻繁に訓練し、お互いをよく知っているので、航空自衛隊や陸上自衛隊のカウンターパートと強い絆を築いている」と語った。

即応演習を通じて、評価チームのメンバーは、警備が突破される状況を含め、敵を模擬し、防衛側が現実的な脅威に対応するよう努めた。

A Japan Air Self-Defense airman, a Japan Ground Self-Defense Force soldier,and a U.S. Air Force defender conduct a secondary sweep

第 374 憲兵中隊の隊員は、連携行動する中で、航空自衛隊や陸上自衛隊のパートナーとの信頼関係を深めながら、後方支援技術を磨いた。「相手部隊と演習する機会があればいつでも。結束こそがすべてです」とマクラニーは言う。「一緒に演習や訓練をすることで、信頼関係が生まれる。そして、これまでの演習の枠組みを基に、互いをより深く理解しあう。もし横田防衛のために彼らが必要になれば、私たちはチームとして協力し、いかなる脅威も排除するだろう」。

ガード・アンド・プロテクト協定は、防衛態勢が強化された際、日本各地の米軍施設における航空自衛隊と陸上自衛隊の警備を強化する協定で、今年で 20 周年を迎える。日米両軍の継続的な訓練により、両国の防衛要員が危機的な状況下で相互の責任を果たすことができるようになる。

（浅井理事仮訳）

新コーナー　「宇宙作戦群の活動紹介」

From Koku-Jieitai Space Operations Group

宇宙作戦群は、自衛隊初の宇宙部隊として 2020 年に 宇宙作戦隊を新編後、2022 年に宇宙作戦指揮所運用隊を加えた 2 個隊で新編された新しい部隊です。2023 年にはさらに 2 個隊が新編され、宇宙領域の把握、JAXA 等との連携、多国間連携等、航空自衛隊が新領域である宇宙で担う重要な役割を担任する部隊です。

宇宙作戦群司令杉山公俊 1 佐と准曹士先任上治忠善准尉の協力をいただき、連載（予定）で宇宙作戦群の活動を紹介していきます。初回となる今号は、宇宙作戦群佐藤章太郎 1 曹から「米空軍 DELTA2 との交流」について寄稿していただきました。　（福永理事記）

寄稿　米宇宙軍DELTA2との交流

Interaction with U.S. Space Force Delta2

宇宙作戦群　1 等空曹　佐藤　章太郎

Group photo of Visitors from DELTA 2 USSF and Space Operations Group

宇宙作戦群（群司令 1 等空佐杉山公俊）は、10 月 4 日（木）米宇宙軍デルタ 2（Space Delta2 ）司令官ラジ・アグラワル大佐（Col Raj Agrawal）以下の部隊訪問を受けた。

米宇宙軍デルタ 2 はコロラド州ピーターソン宇宙軍基地に所在する宇宙領域把握を担う部隊であり、今回の部隊訪問において宇宙作戦群からは運用状況を含めた取組等を説明するとともに、宇宙領域把握に関する幅広い意見交換等を行った。アグラワル大佐を含む多くの隊員が初めての訪問であり、宇宙作戦群における宇宙領域把握を含む宇宙作戦能力について高い関心を持ち、活発な意見交換を通じて相互理解を深めるとともに、さらなる連携強化を図っていくことで認識を共有した。

Briefing at Space Situational Awareness Operation Room

Col Raj Agrawal,Commander of DELTA2 USSF(Left), Col Sugiyama, Commander of Space Operations Group (Right)

昼食会では、日米双方の指揮官及び隊員が日本食のお弁当を一緒に食しながら交流を深め、その後、指揮官、先任下士官・准曹士先任及び担当級それぞれに分かれて懇談し、連携強化に向けて解決すべき課題や今後の部隊間交流等について話し合った。夕刻からは居酒屋にて日本スタイルの懇親会を催し、日本酒を飲み交わして大いに盛り上がり、絆を深めることができた。

CMSgt. Martha Burkhead, Senior Enlisted Leader/ DELTA2 USSF(Left), WO Fujiwara, Senior Enlisted Advisor/ 1st Space Operations Squadron(Right)

Social Party at Japanese IZAKAYA. DELTA 2 and Space Operations Group

宇宙空間の安定的かつ安全な利用を確保するには、同盟国・同志国との 2 国間・多国間連携が不可欠である。今回のデルタ 2 の訪問を通じて、日米の宇宙領域把握を担う部隊間で相互理解と信頼を醸成することができた。宇宙作戦群は引き続き、米国をはじめとする同盟国・同志国との連携を強化し、宇宙空間の安定利用に寄与していく。

在日米空軍各基地の行事への参加

JAAGA members participate in the events at U.S. Air Force Base in Japan

嘉手納基地アメリカフェスト 2023

Kadena AB AMERICA FEST 2023

４月 22 日（土）及び 23 日（日）、嘉手納基地において「AMERICA FEST 2023」が２日間にわたり開催され、JAAGA 沖縄支部長丸野夫妻及び沖縄支部相原事務局長が参加した。

前回 2014 年の開催から実に９年ぶりの実施となり、地元沖縄はもとより全国から多くの航空ファンが訪れ、主催者公式発表によると、来場者は２日間合計で７万人を超えたとのことであった。

AMERICA FEST 2023 takes place at Kadena Air Base, April 22 and 23

今年の一般開放では、日米の主要な戦闘機や輸送機の地上展示や嘉手納基地所在の各部隊の装備品ブースの他に、今回初めての試みで「STEM（Science, Technology, Engineering and Mathematics）ハンガー」が設けられ、各部隊による実演などが行われ、若い世代を対象に科学・技術・工学・数学といった分野への関心を高める体験型イベントが実施され、多くの親子連れで賑わっていた。

Brig Gen David Eaglin, 18th Wing and Kadena Air Base Commander, makes a welcome speech

主催者挨拶の中で第 18 航空団司令官デイヴィッド S. エグリン准将（Brig Gen David S. Eglin）は、2014 年以来９年ぶりに開催出来ることを大変嬉しく思われ、地元地域とのより一層の交流が進むことを期待されていた。また、来場者に対してこのイベントで沢山の素敵な思い出を作り、ここ嘉手納基地での米軍人との友好の絆を覚えていてくれることを願うと共に、その思い出を家族友人の皆さんと共有していただけると幸いであると挨拶を締め括られた。

開催された両日ともに素晴らしい天候に恵まれ、基地内滑走路上に設けられた来場者用駐車場はほぼ満杯に近い状態となり、多くの装備品や地上展示された輸送機等の機内見学には大変長い行列ができていた。普段滅多に見ることのできない装備品や機内を見学できる機会に、多くの来場者が大変満足した様子であった。また、地元商工会等を通じて出店されたキッチンカーやフードブースには長蛇の列が何重にも連なり、こちらも大いに賑わいを見せていた。

９年ぶりに開催された嘉手納基地「AMERICA FEST 2023」は、長らく途絶えていた嘉手納基地地元周辺住民と米空軍との絶好の友好の場となり、沖縄を取り巻く厳しい安全保障環境に対する日米同盟の重要さが深く理解された催し物となったものと思われる。

（相原沖縄支部事務局長記）

2023 横田基地日米友好祭

Yokota AB opens door for the 2023 Japanese -American Friendship Festival

2023 横田基地日米友好祭が５月 20 日（土）及び 21 日（日）の両日開催された。例年９月に開催されていたが、２年間の中止の後に再開された昨年と同様に今年も５月となったものである。初日、午後１時から祝賀レセプションが行われた。周辺自治体、協力団体、官公署の長等とともに、航空自衛隊からは航空総隊司令官鈴木康彦空将、同副司令官森田雄博空将をはじめ、航空総隊主要幹部、近隣部隊長、横田基地司令石井浩之１等空佐等が招待された。JAAGA からは丸茂会長夫妻、上ノ谷（企画）、川口・藤田・村田（渉外）、竹内（広報）の各理事が参加した。

Col Rodan and JAAGA Chairman Marumo and his wife, surrounded by members

Col Rodan offering a greeting at celebratory reception garden in which azalias are in full bloom

このレセプションはこれまで下士官クラブで行われていたが、米空軍横田司令官ラダン大佐（Col Andrew L. Rodan, Commander of Yokota AB）の発案によって会場がラウンジとその前庭に変更され、参加者は盛りのツツジと新緑に囲まれて懇談と会食を楽しんでいた。会の冒頭、大佐は「この友好祭は、我々の基地、使命、文化を日本の皆さんに知っていただくよい機会である。運営に当たった隊員、ご協力いただいた多くの方々に感謝したい」と挨拶された。

19,300 visitors, twice as many as usual

飛行場には米空軍と空自の輸送機（C-17A、C-5M、C-2）や戦闘機（F-35A、F-16C、F-15J、F-2A）などが次々と着陸し、例年の２倍近い 193,000 人の来場者（Yokota AB HP）は、迫力あるステージ演奏やおなじみのアメリカンフードとともに友好祭を大いに楽しんでいた。

（竹内理事記）

エアフォースボール（三沢基地）
Air Force Ball at Misawa AB on Sept.23

Group Photo of Participants

９月 23 日（土）、米空軍三沢基地下士官クラブホールルームで米軍三沢基地司令官リチャード大佐の主催により、2023 米空軍創立 76 周年記念晩餐会（エアフォース・ボール）が開催された。

JAAGA からは丸茂会長代理として池添三沢支部長夫妻及び山本事務局長夫妻が参加した。招待者として航空自衛隊からは北部航空方面隊司令官、第３航空団司令、北部航空警戒管制団司令、北部航空方面隊及び第３航空団の准曹士先任、また三沢市から三沢市長、市議会議長をはじめ各関係団体が招待された。

Col Richard, Mr.Ikezoe(Right), Mr.Yamamoto (Left), and their wives

晩餐会に先立ち、17 時からソーシャルタイムがあり 18 時から晩餐会が開催された。リチャード大佐は「この特別な機会に、参加してくれたすべての人に心から感謝する。私たちはあなたが素晴らしい時間を過ごしたことを願っている」と挨拶した。

Cake cutting for Celebrating 76th Anniversary

晩餐会は国旗・軍旗入場、日米国歌斉唱、お祈り、来賓紹介、戦没隊員及び行方不明者のための行事後、リチャード大佐の挨拶後、夕食会と続き、歓談、ケーキカットが行われ、空軍歌斉唱で晩餐会が終了となった。

（池添三沢支部長記）

エアフォースボール（嘉手納基地）
Air Force Ball at Kadena AB on Oct.7

Col Evans Offering a Greeting

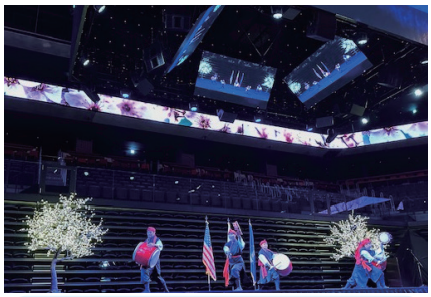
10 月 7 日（土）、第 18 航空団司令官（Commander of the 18th Wing）ニコラス・B・エバンス大佐（Col Nicholas B. Evans）の主催により、第 76 回嘉手納基地米空軍創立祝賀会（エアフォースボール）が開催された。例年基地内の下士官クラブで実施されていたが、今回は「FIBA バスケットボールワールドカップ 2023」の会場となった沖縄アリーナで実施された。広い沖縄アリーナの会場一杯に並べられたテーブルは、米空軍人及びその家族で埋め尽くされていた。

祝賀会は、17 時からカクテルタイムがあり 18 時から開始された。日米両国歌独唱、祈祷、来賓紹介、殉職軍人のためのセレモニーの後、ニコラス・B・エバンス大佐の挨拶に続いて祝賀会が催された。

Tables filling the entire venue at Okinawa-Arena

壇上では琉球舞

踊団の方々が琉舞・エイサー等を披露して会場を盛り上げていた。途中一番若い軍人と一番年取った軍人の２人によるケーキカットで76周年を祝った。また、壇上で行われたパーティーシャツ・コンテスト（Party Shirt Contest）では、各部隊の代表者が上着で隠された柄のワイシャツを独自のダンスパフォーマンスとともに披露し、会場が大きな笑いと拍手の渦に包まれ、出席者全員が本祝賀会を大いに楽しんでいる様子が伺われた。



The Ryukyu Dance Team plays the “Eisa”, Okinawa’s traditional dance on the stage

最後に参加者全員で空軍歌を斉唱し祝賀会は終了となった。引き続きダンスタイムが行われた。

自衛隊からは南西航空方面隊司令官谷嶋空将、各部隊指揮官及び各部隊准曹士先任が出席されていた。JAAGAからは沖縄支部長丸野、及び同事務局長の相原が出席した。

（丸野沖縄支部長記）

エアフォースボール（横田基地）
Air Force ball at Yokota AB on Oct.16

米空軍創設76周年を祝う横田基地 Air Force Ballが、10月16日（土）1800から横田基地格納庫1587（東地区格納庫）において、米空軍横田基地司令主催で開催された。

(Left) Col Andrew Roddan, 374th Airlift Wing commander, gives opening remarks (Right) Brig Gen Jesse Friedel, Fifth Air Force deputy commander, speaks during the 76th annual Air Force Ball

国旗掲揚、日米国家斉唱及び祈りの後、米空軍メンバーによる横田侍太鼓の演奏、ケーキカット、鏡開きなど、日米の伝統が融合したユニークなセレモニーが行われた。

ゲストスピーカーの第５空軍副司令官ジェシー・フリーデル准将（Brig Gen Jesse Friedel, 5AF/Dept Commander）の挨拶等が行われ、米空軍が自由で開かれたインド太平洋を維持するために不可欠な存在であることを出席者に再認識させた。

今回の横田 Air Force Ball は主催者である第374空輸航空団司令官アンドリュー・ラダン大佐（Col Andrew Roddan, 374th Airlift Wing commander）が一人でも多くの人に参加してもらいたとの思いから、会場を東地区格納庫に移しての初めての開催であった。

Team Yokota leadership breaks open a barrel of celebratory Japanese sake

地元の首長夫妻等多数招待されるとともに、空自からは航空総隊司令官鈴木康彦夫妻、横田基地司令石井浩之１佐夫妻等多くの自衛官等が出席されていた。JAAGA からは荒木、金子及び浅井理事が参加した。美味しい食事や会話とともに楽しい音楽やダンス等、祝いの宴は夜遅くまで続いた。

(Left to right) Chief Master Sgt Jerry Dunn, Col Andrew Roddan,Airman 1st Class Kamren Chau, and Col Ryan Vetter, cut a cake

JAAGA Directors with Brig Gen Jesse Friedel and Mrs.Friedel

（浅井理事記）

サンタクロース
作：宇山 OB

JAAGA 沖縄支部便り

JAAGA Okinawa branch news

現地研修開催

Holding of field training

6 月 16 日（金）、JAAGA 沖縄支部は沖縄支部正会員並びに賛助会員を対象とした在沖縄自衛隊と米空軍嘉手納基地への研修を実施した。

この研修は激化する安全保障環境の中心地である南西諸島地域で、日本の防衛を担う航空自衛隊南西航空方面隊と米空軍第 18 航空団などを視察し、特に民間の支援者である個人賛助会員の方々に現下の安全保障環境を実地に理解していただき、もって自衛隊と在日米空軍の取り組みに対する理解及び支援をいただく事を目的とし、昨年に引き続き 2 回目の実施となった。

昨年は空自那覇基地所在部隊のみの研修であったが、今年は陸自那覇駐屯地での戦史ジオラマ研修と海自 5 空群 P-3C 研修と在沖縄陸海自衛隊部隊の研修も取り入れ、複合的観点から南西方面周域での自衛隊活動を理解していただいた。

Maj Gen Suzuki, middle, Col Inadome, Flight Group Commander of 9th Air wing, left, and JAAGA visitors

午後は米空軍第 18 航空団が所在する嘉手納基地へ移動して概況説明を受けた後、車窓からの大型輸送機等の視察並びに格納庫内においては退役が決まった F-15C 戦闘機の段階的米本土への帰還に伴い暫定配備されている戦闘機等を研修することができた。

現在嘉手納基地には F-35A ステルス戦闘機と F-15E ストライクイーグルが米本土などから飛来しており、米空軍のインド太平洋地域における戦略的プレゼンスを広く内外にアピールしている事を間近で理解していただくことができた。

JAAGA members in front of F-35 and F-18s at the USAF Kadena Air Base

当研修に関しては、南西地域における自衛隊及び米軍の活動状況を広く知っていただくとともに、JAAGA 沖縄支部の活動への今後益々の理解並びに支援をいただけるよう、今後も継続的に実施することを検討している。

バーベキュー懇親会開催

Barbecue social gathering held

9 月 9 日（土）、JAAGA 沖縄支部は支部として初のバーベキュー懇親会を、那覇市久茂地の商業ビル屋上において開催した。

懇親会には、空自南西航空方面隊副司令官中島将補、南西航空警戒管制団（南警団）司令世良将補、南西高射群司令山崎 1 佐、南西航空音楽隊（南音隊）隊長三宅 3 佐の各指揮官司令官に加え、南西航空方面隊准曹士先任上原准尉、南警団准曹士先任小暮准尉、那覇基地准曹会長遠藤 1 曹に参加していただいた。

今回は、特に賛助会員の皆さんに直接各准曹士先任との懇親の機会を設け、南西域最前線部隊における准曹士隊員の現場レベルにおける実情等を理解していただければと計画した。

バーベキューに関しては、夏季休暇明けの南警団司令や南音隊長から各先任の方々等、多くの参加者が率先して焼き物係を買って出ていただき、煙に包まれながらお肉野菜等の調理にあたっていただいた。

JAAGA Okinawa branch hosts BBQ party inviting Koku-Jieitai commanders and Senior Enlisted Leaders, September 9

9 月最初の週末、残暑厳しい中での開催ではあったが、ビル風の心地よい雰囲気のなか、これまで以上にビール等片手に懇親を深める事ができた。そのなかで、それぞれの出身地の話題となり、奇遇にも同じ高校の先輩後輩の仲という賛助会員さんと某司令が居られ、若き高校時代の話に花が咲いておられた。

これまで沖縄支部では、JAAGA 表彰式前の懇親会のみの開催であったが、今後は在沖空自関係者との懇親の機会を多く持ち、いずれは JAAGA 沖縄支部主催の「在沖日米空軍関係者懇親会」を実施したいと思っている。

沖縄支部では、今後も機会を捉えて会員及び賛助会員相互の交流並びに在沖空自関係者との懇親を深め、JAAGA 活動をより一層発展させていこうと考えている。

（沖縄支部便り：相原沖縄支部事務局長記）

JAAGA 理事の活動紹介 「財務理事」

今回は「理事の活動紹介シリーズ」のトリとして財務理事の活動をご紹介いたします。

財務理事の主な活動は、①会員皆様に対する年会費納入案内業務、②年度を通した出納業務（日々の資金管理）、③決算報告、④年度予算案の策定、⑤各種イベントにおける会計業務などです。財務は貴重な資金をお預かりしていることから、金銭トラブルは許されません。帳簿管理業務と払出し・振込み業務を分離するとともに、筆頭理事による財務理事間の恒常業務のやり取り確認（メールチェック）など、2重3重のチェック体制を確保しながら日々の業務を実施しています。

本年5月、新型コロナウイルスの位置づけが季節性インフルエンザ並の「5類」に移行されましたが、コロナ禍を契機として財務理事の活動形態も大きく変化しました。

コロナ禍以前は、ＪＡＡＧＡ各理事が担当事業で発生した立替え金（物品購入や業者への支払い）を財務に請求し、それを受けた財務理事が都度現金を引出し、定例会議等の機会を捉えて「1円単位」で封筒詰めして手渡ししていました。まさに大昔の「給料現金渡し」のスタイルです。しかし、定例会議に毎回全員が集まる訳でもなく、渡しきれない現金は財務理事が手元保管する状況でした。何ヶ月も定例会議に出席していない理事が、めずらしく出席したと思ったら、当然のごとく立替え金の支払を求められるなど・・・　まあ、大変な状況でした。さらに、コロナ禍に見舞われてからは、定例会議はリモート主体となり、各理事と会う機会は激減、立替え金の支払いは何ヶ月も滞る状況となってしまいました。

「この閉塞状態を打破するには、インターネット・バンキングに移行するしかない。」ということで、ＪＡＡＧＡにおいても遅ればせながらオンラインによる出納業務へと舵を切った次第です。結果として、帳簿管理担当者の記帳の機会が激減し、支払い担当者の現金引出し・振込みのための「銀行詣」が不要となるなど、いわゆる「働き方改革」が飛躍的に進みました。

同様に、本年度から総会に続く懇親会費を事前振込とさせて頂きました。過去の例を紐解きますと、懇親会当日に会費を頂くことは大変な作業で、事前に領収書やお釣りのための大量の千円札を準備して（これが結構骨が折れまして・・・）、出席者名簿を逐一照合しながら受付作業を進めていきます。戦場のような受付業務が一段落したところで、頂いたお札を中間集計。この作業は、懇親会が始まっても何回も続きます。そして、当日お預かりした多額の現金は、その日のうちに会場ホテルへ払込みを行い、財務理事の受付業務は終了となります。今回からの懇親会費の事前振込み制の導入により、上記作業がほぼ無くなったことから、財務理事を始め、当日受付を担当する他の理事の「働き方改革」が一段と進みました。

財務理事の活動に関する「働き方改革」は、この他の事業にも順次適用を開始しております。年2回の米軍基地研修における会計業務です。年2回の米軍基地研修（横田基地＋隔年での嘉手納基地 or 三沢基地）では、これまでは参加費を当日現金で頂いておりました。当日多額の現金をお預かりし、研修の期間を通して管理する会計担当理事の負担は決して少なくありませんでした。さらに、近年のキャッシュレス化の浸透のためか、米軍基地研修参加者の中には、当日ご自宅から集合場所までの間にＡＴＭで現金を準備される方がいらっしゃいます。しかしながら、嘉手納基地や三沢基地研修においては、出発地である入間基地の最寄り駅から集合場所までの間にＡＴＭはございません。米軍基地研修参加者及び会計担当理事の負担軽減の観点から、今後とも参加費は原則として事前振込とさせて頂くこととしております。

この他、年会費を納めて頂く業務に関しては、試行錯誤の毎日です。年会費を滞納されている方へのご案内（この業務は結構辛いです・・・）、過払い（又は不足）の方への対処、年会費を納入して頂いたにも係わらずお名前が分からない方への対応等々、日々勉強させて頂いております。一方で、大変有り難いこともあります。年会費納入業務に関する電話での問合せにおいて、これまでにご面識のない大先輩から1時間も、貴重なお話しを頂いたことや郵便振替の振込取扱通信欄に励ましのお言葉を頂いた時などは、これまでの労苦が吹き飛び、心機一転、今後も業務に邁進しようと思う次第です。

財務理事の仕事は究極の裏方であり、ミスなく実施することが当たり前とされる業務です。それ故に財務理事一同、今後も気を引き締めて金銭トラブルの防止に努めつつ、ＪＡＡＧＡの各種活動をお支えして参る所存です。

（平元理事記）

新入会員紹介

正会員（３名）

氏　名	住　所	氏　名	住　所	氏　名	住　所
川波　清明	東京都新宿区	秋山　圭太郎	千葉県市川市	石橋　英治	千葉県松戸市

個人賛助会員（８名）

氏　名	住　所	氏　名	住　所	氏　名	住　所
若目田　壮志	東京都豊島区	天坊　真彦	東京都世田谷区	新城　正巳	沖縄県国頭郡
小山　祥子	栃木県下野市	西脇　光夫	石川県小松市	武井　久直	東京都西東京市
大場　馨	東京都西東京市	山田　みよ子	埼玉県川越市		

賛助会員の皆様へ

日頃から JAAGA 設立の趣旨に賛同され当会の活動にご協力いただき、ありがとうございます。三沢基地、横田基地、嘉手納基地の研修に参加された賛助会員の皆様には、当方から所感文の寄稿をお願いし、研修の意義のみならず JAAGA の多様性をも噛みしめられるような味わい深い所感を頂戴しているところです。

このような寄稿に加えて、法人、団体、個人の賛助会員の皆様からの投稿も、幅広く募集しております。

テーマは自由、1 件につき JAAGA だより 1 ページ以内程度（400 ～ 2,000 字程度）、写真、図表等を含めていただいても結構です。細部要領等は広報係からご連絡いたします。

JAAGA 入会に至った経緯、企業・団体の概要、個人の活動等の概要、JAAGA に対する要望、航空自衛隊・米空軍に対する貢献活動等、日米現役隊員に対する期待・激励等、思うところを自由にお書きください。

賛助会員の皆様の積極的な投稿を、お待ちしています！

【法人賛助会員の皆様】29 社
株式会社 IHI、株式会社 IHI エアロスペース、株式会社石橋オフィスサポート、伊藤忠商事株式会社、株式会社エクシオテック、沖電気工業株式会社、川崎重工業株式会社、株式会社シー・キューブド・アイ・システムズ、株式会社 SUBARU、住友商事株式会社、双信商事株式会社、双日株式会社、東京航空計器株式会社、東芝インフラシステムズ株式会社、日本電気株式会社、日本飛行機株式会社、ノースロップ・グラマン・ジャパン、富士通株式会社、渕上建設工業株式会社、Boeing Japan 株式会社、丸一土地建物株式会社、丸紅エアロスペース株式会社、三菱重工業株式会社、三菱商事マシナリ株式会社、三菱商事株式会社、三菱電機株式会社、三菱プレシジョン株式会社、株式会社武蔵富装、ロッキード マーティン グローバル インコーポレーテッド
【団体賛助会員の皆様】２団体
ハイフライト友の会、三沢市防衛協会
【個人賛助会員の皆様】101 名

投稿募集のご案内

日米エアフォース友好協会（JAAGA）は、お蔭様で令和６年７月で創立 28 周年を迎えます。日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。「JAAGA だより」も、JAAGA 活動の広報と空自、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様（会員に限らず現役隊員の皆様）からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のないご意見やご感想も是非お寄せいただきたくお待ちしています。

【連絡先】　（郵便）　〒 160-0002　東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号
ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
日米エアフォース友好協会　広報係
（メール）　pubaffair@jaaga.jp

会員募集

○ 今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員3名、賛助会員 8 名の合計 11 名の入会を得ることができました。
○ 令和 5 年 11 月 30 日現在、正会員数 259 名、個人賛助会員数 101 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 29 社となっております。
○ 今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。
なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。
推薦、若しくは、情報提供を頂いた方には直接会員担当理事から連絡させていただきます。

【入会資格】
正　会　員 ：航空自衛隊の OB
賛 助 会 員 ：航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。

【連絡先】
郵　便　　：〒 160-0002
東京都新宿区四谷坂町 9-7　ZEEKS 四谷坂町ビル 3F
日米エアフォース友好協会　会員係
メール　　：membership@jaaga.jp

編集後記

◆「だより」の編集作業をしているとき「J アラート」の発令がテレビから流れ不気味な恐怖を感じた◇世界ではロシアがウクライナを侵略しパレスチナ情勢は混迷を深めている中で、日本の周辺では中国が軍事的な力を強め北朝鮮のミサイル開発が進んでいる◇平和を守る軸となる日米同盟、中でも重要な日米空軍・宇宙軍の協力・連携に微力でも力になれることを祈る◇だより 65 号の発行に際して多くの方から投稿をいただき、お陰様で充実した紙面になった。読者の皆様に心より感謝し、引き続き個性とチームワークで「JAAGA だより」の編集に取り組む所存◇今号から「JAAGA 理事の活動紹介」の連載を終了し、新たに「宇宙作戦群の活動紹介」の連載を開始した（編集長）

◆挿絵にいただいている「日々笑進」に支えてもらっています (F)
◆日常が戻り忙しい日々ですが、その忙しさに幸せを感じる今日この頃です。年末年始に向け元気に前向きに望みましょう（A)
◆先日、防大名物「棒倒し」を間近で見ました。純粋に肉弾相見える姿を見て、懐かしい思いとともに一心不乱に自分の持ち場を果たすことの大切さを思い出しました。編集頑張ります！ (I)
◆めまぐるしく変化する世界情勢…。酷暑、長く厳しい残暑と一気に深まる秋、これまでとは違った季節の移ろい…。四季折々の美しさがあり、人々が和やかに暮らせる素晴らしい日本であり続けて欲しいと思います（O)
◆ようやく以前の毎日が戻り各種交流も活発になってきましたが､急激な bounce back に消化(アルコール分解)不良気味です(S)
◆各地で航空祭が復活しています。新入隊員入隊募集のためにも喜ばしいことです（T)

作：山本康正 OB

編集担当（広報理事）：福永充史、浅井玲、池田五十二、太田徹、菅原政弘、竹内由則
JAAGA だよりは、ホームページからもご覧いただけます（創刊号から第 49 号までは「20 年の歩み」に掲載)。
（JAAGA ホームページ：http://www.jaaga.jp/）